
大罪宝具と異世界戦争

mosasa100

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大罪宝具と異世界戦争

【Nコード】

N6899Z

【作者名】

mosasa100

【あらすじ】

属性と呼ばれる加護が存在する異世界。気が付いたらその世界で美少女に生まれ変わっていた元男のギリア。王国の闘技場の地下で行われている大会に参加しに来た彼女の目的は、優勝者に与えられる武器、大罪宝具を手に入れることで……

ばっちり厨二病なので、苦手な人はご注意を。現実からの転生系、TS、百合要素、などが含まれる予定ですので注意してください。

序章 地下闘技場にて

様々な種族や民族が存在するこの世界の中の一つに、緑豊かな大地と、豊富な資源に恵まれた王国『イワニガーナ』という国があった。

その国には、腕利きたちが集まり競い合う、王立の闘技場が存在した。そこで優勝した者には一生遊んで暮らせるほどの賞金と栄光が手に入るとまで言われているほどの大規模な闘技場だ。年間数えきれぬほどの者がそこに挑むが、勝者は一年に一人のみ。それでも挑戦者が絶えないのは、やはり魅力があるからなのだろう。

円形の闘技場で、観客席は高い足場に来ており、一番見やすい高さには主賓席なども存在する。一番低く、大地と同じ高さの位置が戦うフィールドだ。つまり選手は、360度周りから見下ろされる形となっている。

その日は、ある有名な騎士がその闘技場に参戦するという話で持ちきりになっており、どこもかしこもざわついてばかりだった。

そんな闘技場の地下。まるで天地が逆さになったように、真逆の闘技場がもう一つ存在していた。地上の闘技場を騎士道を重んじる正式試合だと考えれば、こちらは死合い。ルール無用の殺し合いだ。そんなアングラな闘技場の控室で一人の少女が下品な表情で笑っていた。

戦うための衣装にしては露出の多い、布地だけで作られたものを着た17・8歳程度の少女は、その女性として発達した体形や美しく長い銀髪に似合わぬような表情で頭を掻き、上を見た。

「なんだよ。随分うるせえな」

その言葉に、控室に居た他の参加者のうちの一人、肉だるまのよくな大男が言った。

「知らねえのかい嬢ちゃん、今日は上に騎士様が来てるんだぜ？」

「騎士様ア？　なんでったってそんなお偉いさんがわざわざ来たら

「っしやるんだよ」

少女の言葉に、大男は首を振った。

「悪い、そこまでは知らねえわ」

「なんだよ、じゃあわざわざ話しかけてくんじゃねえよ。それとも何か？　こんな美しいオレと何とかお話をしようとか共通の話題でも探してたのかい？」

そう少女が言うと、大男は心外だと言うような顔で大きく両手を振った。周りの他の参加者たちも抜け駆けしやがってというような目で大男を睨んでいる。

「つつか、なんで嬢ちゃんみたいなのがこんなところにいるんだよ。しかもそんな服装でよお」

「ここは娼館の客取りする場所じゃねえぞ」

大男の言葉に、他の者が同調するように声を上げる。

「ここは何でもアリの方だけ？　地上と間違えてるんじゃないの？」

「負けて犯されても文句言えねえよ？　ヒヒッ」

じろり、と全身を嘗め回すような視線を感じ、少女はより一層下品に笑う。

「くひひっ！　オレを犯そうってか？　良いね、この視線、ああ、堪んないわあ。良いぜ？　もちろん勝てたらな」

少女の言葉にその場にいた全員がごくりと生唾を飲む。それほどまでに性的な魅力を感じる体形をしているのだ。

「その言葉、後悔するなよ？」

「しねえよ」

その時、地上の方で試合を告げる鐘が鳴った。地上と地下の試合開始時間は完全に同時刻と決まっているので、選手たちも立ち上がる。

「さって、どんな組み合わせになるかなあ」

少女が体を伸ばして、一度大きく深呼吸する。その動作をまた周りの男たちはじっと見た。その視線を感じながら、少女は控室から出た。

地上側の地面に当たる部分が天井となっており、そこからドーム状に観客席があり、最下層の、地上では空に当たった部分が戦闘のフィールドとなっている。

司会実況役の女性の声が響く。

『さあようこそ！ 史上最も過酷な闘技場へ！ ここに集まりたるはこの国の真の先鋭のみ！ 上のやつらとはわけが違う！ 我らこそ真の強者なり！』

観客席の下層側、一般客用の席から歓声が沸く。

『それでは参りましょう！ まずは注目の第一戦！ いきなり新人です！ この美貌！ この肉体！ この露出！ いったい何を武器に戦うのか！ ギリア選手です！』

どこかで聞いたことのある名前ですね、と呟いた実況の声を背に、少女、ギリアはフィールドに上がる。

観客席の男性陣から歓声が上がった。

布をまとっただけのように見える服装も、彼女が着ることで立派なファッションの様に見える。

反対側のゲートの向こうから対戦相手が姿を現す。

『対するはベテラン肉だるま！ その肉の下に埋もれた者は数知れぬ！ 超重量型パワープレイヤー！ 本名不詳！ 大男！』

先ほどの大男が現れる。大男の方も鎧などは着ていない。観客席の方からはブーイングと歓声が半々で聞こえる。ギリアはじつと前を見た。

『ルールは簡単！ 先に相手を殺すか戦闘不能にした方の勝ち！ 何をしててもOKです！ では参りましょう！ 試合つ開始！』

「試合相手、あんだだっただのか」

ギリアは大男を見た。鎧の類は着ていない。肉体に自信があるのだろうか。

「降参するか？ 今なら壊さずに帰してやらないことも無い」

「うんにゃ、必要ないね、オレ強いからな」

そう言うと、ギリアは一瞬で大男の懐まで飛び込み、渾身の右ストリートを打ち込んだ。

『ギリア選手速い！ 目にもとまらぬ速さで殴りに行ったーッ！
しかし、大男効いちゃいない！』

「チツ！」

ギリアは大きく後ろに跳び距離を取る。

妙な感触だなオイ。ギリアは手を何度か握り、感触を確かめる。

「ふむ、確かに速いな。しかし軽い軽い。大罪人『暴食』の御方の配下である俺の敵じゃあねえな。嬢ちゃん」

『そうッ！ この大男！ 世界に七人しかいない大罪人の一人『暴食』の配下なのです！ つまりこの男も暴食の加護を受けているという事！ つまり属性は『暴食』！！ 喰えば喰う程強くなる！
こいつの脂肪は底なしかー！ーッ！！！！』

実況の声を聴き、ギリアはなるほどね、と頷いた。

「それにしてもノリノリな姉ちゃんだ。良いテンションだな」

『お褒めに頂き光栄です！ しかしギリア選手！ このままなすべもなくヤラしてしまうのか！！』

「聞こえてんのかよ」

大男は、そうだろう、と頷いた。

「聞こえているんだろうな、毎回、耳が良いもんだ。じゃあ行くぜ嬢ちゃん！」

ぼよん、と弾むように飛び跳ねた大男は、そのまま凄まじい勢いでギリアに向かって飛び込んだ。

「スーパーボールか何かかよッ！」

横に転がり避ける。すると元居た位置に大男が激突し、地面を削り転がっていく。そのまま地面を凹ませながら二三度跳ね、再び大男はギリアの方へと飛び込んだ。

「めんどいな！」

ギリアはタイミングよく回し蹴りで迎え撃つ。蹴りのぶつかる瞬

間、足が大男の巨体の中へと沈んでいった。

「クソツたれ！」

「そのまま沈みな嬢ちゃん！ 肉の下でぐちよぐちよにしてやるよ！」

『大男鬼畜です！ 我々には見せないつもりだーッ！ 見せるよ肉だるまー！』

ギリアは、片足の裏を地面に固定し、無理やり脂肪に沈んだ足を引き出し、そのまま再びその脂肪に蹴りを打ち込んだ。

「今のは ゴボツー！！」

大男はその不可解な動きに疑問を覚えた瞬間。全身を衝撃が駆け巡り、吹き飛んだ。

大男は混乱していた。あそこから、脱出などできるのか！？ 片足で、無理やり引き抜くなど、どういう筋肉だ！ しかもあの攻撃は、何だ！？

『吹っ飛んだーッ！？ ギリア選手！ 肉だるまの脂肪から脱出！ あの脂肪を蹴り飛ばしたー！！！！』

ギリアが両足を地面につけ、膝を叩いていると、大男が叫ぶように言った。

「なんだ今のは！」

その言葉にギリアは胸をつき出すようなポーズを取った。

「機族キキゾクの族長！ 『色欲』ギリアたアオレの事よ！ 決まったな！ キヒツ！」

「『色欲』だとお！」

『どおりで！ 聞いたことある名前でした！ 『色欲』ギリア！ 体を自由自在に謎の物質に変える事が出来るという謎の部族！ 機族の出だという！』

「ヒュ〜、盛り上げるねえお姉さん」

ま、謎の物質ってわけじゃないんだけどね。ギリアは笑みを深くする。

「自分の正体を明かす！ この瞬間が最高に気持ちいい！！ 酔っ

「ちやうわあ！ うふふ」

「てめえみてえな小娘が大罪人『色欲』だと！！」

唾を飛ばしながら大男が叫ぶ。

「オレみてえな若い美女だから『色欲』なんだよ！ 熟女趣味は隅
つこで泣いてな！ じゃあ行くぜ！」

そう言つて高く掲げたギリアの右腕の肘から先が、光の中でぐに
よりと形を変える。光のおさまった場所には、全長2メートルほど
の、円柱の先に大き目の半球を付けた様な、巨大な金属の塊になっ
ていた。それを左手で支えながら、前方、大男の方へとつき出す。

「淫凸いんとう！」

『妙にエロい形だーッ！！ あんなデカいの見たことない！』

「やっぱ肉の中にぶち込むんならこの形じゃなきゃよオ！」

それに対するように大男が吠える。

「そんなもの俺にぶち込む気か！！」

「モチ！ 足腰立たなくなるまでぶち込んでやるよ！！」

「ならば！ そのまま押しつぶすだけだ！！」

再び脂肪の塊となって突進してくる。先ほどよりも勢いがある突
進だ。対するギリアは、両足の裏から地面に向かっていくつももの金
属の針を生やし、打ち込むことによつて、自分の体をその場所に固
定する。そのまま体を捻り、勢いをつける。関節などは金属に変え
て補強する。

「潰れる小娘ッ！！」

捻った体をもとに戻す勢いで、一気に相手の体に打ち込む。普通
の肉体ならば悲鳴を上げるが、ギリアの体は今金属で補強されてい
るので、限界を無視した勢いで放てる。

そして衝突。

衝撃音と共に、ずぶり、と脂肪に沈んでいく淫凸を見て、大男は
勝利を確信した。

このまま、潰れる！

そんな様子を見て、ギリアはキヒツと笑った。

「こいつあな！ 1秒間に69回、先頭部分が前後にピストン運動する作りでな、ほら来た来たキター！」

その言葉と共に、舌を出したギリアの眼前で、大男は痙攣するかのようには振動を始めた。

「逝っちまいな！ 穿てよ淫凸ッ！！」

ピストン運動により、半球と円柱の間のそりかえしの部分に挟られた脂肪が、血と共に周囲にまき散らされる。

「ガアアアアアアア！！！」

ドポリ、という音と共に、脂肪の塊を淫凸が貫いた。そのまま淫凸は光の中に消えていき、大男は地面に倒れた。

『私、大男選手の悲鳴を初めて聞きました。彼が血を流している所を見るのも初めてです。圧倒的だーッ！ ギリア選手、圧倒的実力差で、ベテラン相手に初戦を勝ち抜いた！！』

そんな実況を聞きながら、ギリアは血の付いた右腕を振り払った。血を少しなめてみる。

「不味い。食うもんが悪いな。それじゃただのデブだ」

『勝者！ ギリア選手！！』

「ま、当然ってことよ」

照明を浴びながらギリアは考える。

オレがこの世界に来て、女性になって17年ってとこだったか。ついにここまで来たな。

先代にして初代の『色欲』が残した大罪人専用宝具『罪具』、『色欲のアスモデウス』。それを求めて旅をして、たどり着いたのがこの地下闘技場だった。ここに罪具の一つがあるという情報を受けたのだ。

「うふふ、それさえあればもっと快樂が、ああ、本当に楽しみね、楽しみだなあ！」

1章1話 『色欲』のギリア

ギリア・レプタンサは一族の人間から見ても妙な子供だった。

イワニガーナ王国の外れの森の中、小さな村に隠れるように住む一族、機族。その中でも、飛びぬけて奇妙な子が、ギリアだった。

小さなころから、異常なほどに美しかったギリアは、しかし生まれつき男言葉で話すのだ。自分のことを男かと認識しているのかと思うと、それに反して女性を強調する格好をする。小さなころから不思議な色気に満ちた少女だった。

親が早くに死んでしまい、孤児となったギリアは、その性格も相まってか村では浮いた存在だった。

いくら綺麗でも、いや、綺麗だったからか、その不釣り合いさでいじめられたりもした。それを全員倒したら、今度はそいつらの親がやってきた。なんてことはない、日々戦って生きてきた。

この世界の住人には、生まれながら、或いは生きる過程にて、それぞれ属性というものが与えられている。

例えば、『純潔』『希望』『暴食』などが挙げられる。さらにそれらを極めた人間には、それぞれ呼び名が付くのだ。属性『勇氣』の到着点『勇者』や、『慈愛』の到着点『女神』などである。他にも特殊なものとしては、『嫉妬』『暴食』『憤怒』『怠惰』『色欲』『傲慢』『強欲』の7属性、それぞれ極めた者を大罪人と呼ぶなどである。

ギリアの属性が『色欲』であると判明した時、周りの大人たちは一様に納得した。ならばこの色気も領ける、いっそ娼館にでも売ってしまおうか、と。

決まってからは早かった。男たちは、処女のまま売るべきか、一度楽しむべきかという話をしながらギリアの元へと向かうのだった。

自分の属性が『色欲』だと知った時、ギリアは啞然とした。

「くひひ、おい、オレが色欲ってことは、つまりあれか？ オレが男に抱かれることを願ってるとか、そういう事か？」

露出させた臍を撫でながらギリアは考えた。そのまま身をよじる。この露出は敢えての事なのだ。こうでもしなければ、こうでもして自分に見せつけなければ、体と心の齟齬から気が狂ってしまいそうだったから、苦肉の策だったのだ。

「それが今度はこれかよお。良いね神様、いい試練っぷりだ。生きてる実感が湧くねえ。ま、神様なんか見たことないけど」

いるのだろう、自分がこんなところで生まれ変わっているのだ。

きつといるのだろう。そう考えた方が打ち滅ぼす目標が出来て良い。「良い、ああ、いい……なるほどね、こりゃまあ、気持ち良い感覚ね、うふふ」

障害を乗り越えた時を想像すると、言いようもない興奮と快樂が押し寄せる。

この感覚が快樂なら、はまる人が多いのも頷ける。捕まえようとしてきた大人の腕を、刃に変えた腕で切り落とす。

大人が何か叫んで、喚いていた。

「ああ、みつともないわ、みつともねえなオイ」

何か、また叫ぶ。

構わない、この村には何も未練はない。ならば彼らはオレの糧となるべきだ。そうギリアは笑った。舌をべろりと出して、それを男たちに見せてみせた。

「ああ……」

そのまま溜息をついて、自分の体を抱くように腕を交差させる。背中から、大量の銃口を発生させる。

トリガーは心の中にある。念じれば一斉掃射だ。打ち出される弾はギリアの精力の塊。

「貫け、うふ」

全身から弾が発射される。

周りに立っていた人間、大人も子供も、男も女も関係なく、村中が貫かれていく。防御の為に体を金属に変えた者もいたが、それすらも貫いて弾丸は行く。

やがて全てを打ち終えて、静かになった村の中心でギリアは空を見上げた。

妙なものである。こんなに簡単に殺せてしまうのに、今までやられる側に甘んじていたというのが、実に妙だ。

血の池に一人立ち、ギリアは笑う。そのまま、血が跳ねるのみにせず歩き出した。

「ああ、なんでもっと早くやらなかったんだろう、オレもまだまだ馬鹿だなあ」

まだ生き残りがいたらしい、民家から女性が飛び出してきた。確か、最初に腕を切り落とした男の妻だっただろうか、とギリアは考えた。

この淫売が、とか、育ててやった恩を、とか、あんたが夫を誘惑した、だの言っている女性に向けて、ギリアは右腕をつき出した。

「淫凸」

そしてあらわれる、2メートルの金属の塊。それを構えながらギリアは言った。

「あなたに魅力が無いのが原因じゃない、なんつってな。くらいな！ 壊れるまで愛してやるよ！」

そのまま、下腹部目指して一気にぶち込んだ。淫凸は、女性を貫いて、赤黒く光っている。

淫凸を解除して、右手に付いていた血を舐めてみた。ちょっとしたかっこつけのつもりだった。

「あん、おいし……おいおいまじかよ」

自分の反応に呆れたギリアは、頭を掻きむしった後、村全体を見回す。

「さて、どうすっかな」

もつここに居る必要もないだろう。ならば、ただ自分の欲望を満

たすように生きてみようか、ただ強く、淫らに、美しく。それはとても、

「素晴らしいかもしれないわ」

もつと多くの危機がオレを襲うのだ、そしてそれを圧倒的パワーで虐げる。素晴らしい人生だ。

前世には比べものにならないほどに、きつと素晴らしいのだろう。「ならまずは大罪人を目指すか、とりあえず、淫らに殺りまくればいいのかあ？」

村から一步出る。どちらに行こうか、わからないことだらけだ。

そうして、ギリアの当てのない旅が始まったのだった。

それが5年前だっただろうか、とギリアは考えた。

今思い出すとずいぶん恥ずかしい言動だった気がする。

ともあれ、5年で大罪人仲間入りを果たし、罪具のありかを見つけるところまで来たのだ。随分順調なのだろう。

歓声が聞こえた。地上の方からだろう。実況の声も聞こえる。

『さすが、圧勝だ！ 寄せ付けない！ 『忠義』の騎士ベロニカ・ルリトラノ！！ 名譽の名は美貌と共にそこに居た！！』

どうやら噂の騎士様らしい。ギリアは地上を見上げた。

罪具が現れるのは、年に一度、地上と地下両方の王者の記念試合の時のみと決まっているらしい。

「ああ、早く見てみたい……」

なれば、勝ち残らなければ。相手は後何人だろうか。

ギリアは自室として宛がわれた、闘技場地下の一室の天井を、じつと見つめ続けた。

1章2話 不戦勝の日

「不戦勝だあ？」

突然そのような事を言ってきた闘技場の運営側の男性に対して、ギリアは素っ頓狂な声を上げた。

「はい、そうですギリア様。なんでも相手側が大怪我をしたとか」「そいつは、ありがたいね」

そうでしょう、とその男は頷いた。総当りで試合を行い、最終的に負けが少なく勝ちが多い人物が優勝となるのだが、ここでは一回の負けで再起不能に陥ることが多いので、大会形式は実質負けぬけとなっていた。つまり、優勝するには最後まで負けなければいいのだ。そんな状況で不戦勝とは、実に幸運なことだった。

しかし、とギリアは首を振る。

「最近妙に多くねえか？」

「何がですか？」

「不戦勝」

「いえ、こちら側ではギリア様の不戦勝は一回目だと記憶しておりませんが」

「そうじゃねえ、とギリアは否定した。」

「そうじゃねえんだ。他のやつらも不戦勝してるだろってことだよ。そうなのだ。ギリア以外の選手でも、最近不戦勝が続いているのだ。故に、選手たちは勿論観客たちも随分と欲求不満な状態のようだった。」

妙だ、とギリアは考えた。何故こんなにも連続して大会参加者が次々と怪我を負っていくのだろうか。それも地上の人間も地下の人間も無差別にだ。

「おい、運営側はこの事態ほっといてるのか？」

ギリアがそう尋ねると、男は丁寧な仕草で頷いた。

「勿論でございます。そもそも、そのような場所で負傷なさいますような方は、この闘技場には相応しくない、と我々は考えておりますので」

「なるほどねえ、クールなもんだな」

ギリアは座ったまま足を組み直した。いえいえ、と男は否定する。「今回の大会は早々に決着がついてしまいそうで、我々としては戦々恐々ですよ」

そう、男は涼しい顔で言った。はん、とギリアは鼻で笑う。しかし、この状況はギリアにとっては悪いものではないらしい。

苦勞なく罪具にたどり着けるってわけだ。ギリアは心の中で呟いた。どこにあるのかもわからなかった罪具。それが今このすぐそばにあるのだ。しかし問題は、優勝しなければ見ることも触れることもできない事。そういう属性の人間がいるのだろう。地上と地下の優勝者の試合の日以外は綺麗に隠してしまっているのだ。

ただまあ、罪具が『色欲』以外の可能性といるのあるんだけど。そのことを考え、ギリアは溜息をついた。

そんなギリアを無視したまま、爽やかに微笑みながら男は言った。「そういう訳で御座いますので、すぐに次の対戦相手が決まります。予定していた日時に、そのまま戦えることでしょう」

「おう、わかった。了解」

手をひらひらと振りながらギリアは答えた。と同時に、男の顔を見る。涼しげな顔で立っている男を見て、ギリアは少しイタズラしてやろうか、などと考えた。

「なあオイ、それにしてもこの部屋暑くねえか？」

襟の部分をつまみ、大きく開かせて空気を入れる。ギリアはそのまま男を上目使いで見た。

「クーラーとかは……あるわけねえわな」

「クーラー？ それはいつたい何ですか？」

「いんや、何でもねえよ。それより、暑くてしょうがないな」

「そうですね。今日は特に暑いですね」

涼しい顔してゆくせに、と呟きながら、ギリアは服を脱いで下着だけになり、再び反応を確認しようと男を見た。

「ギリア様。どうか服を着てください」

その言葉にギリアはニヤリと笑いながら言った。

「暑いんだからしょうがないだろ。それとも何だ？ 興奮してくるか？」

「はい。端的に言えば」

「……」

毒気を抜かれた。そう思った。ギリアは意地でも着てやるか、と舌打ちした。

「それともギリア様は、まさかここで押し倒されることをご所望で？」

「オレはそれでも良かったんだがな。最近の男はヘタレで困る」

「そういう貴女はどうも何か急いでいるかのような……つと、失礼いたしました。女性に恥をかかせてしまいましたね」

そう言うと、男はそつとギリアの手を取り、その甲に軽く口づけをした。

「うわ……ナチュラルにそういう事できる辺り、お前本当にただの闘技場の人間かよ。どっかの執事とか言われても納得できそうだ」

「まさか、ただの運営員に御座いますよ。もし本当はどこかの貴族なんて言った場合、真つ先にあなたに上着をかけて差し上げていますよ」

「はん、さいですか。もう下がって良いぞ」

ギリアがそう言うと、男は畏まりましたと深く一礼した。

「それではギリア様。次の試合までどうかご自愛を、そしてご健闘を。私、ギリア様のファンで御座いますので」

そりゃ嬉しいねと呟いて、ギリアはそつと目を閉じた。

次の試合までの開いた数日、ギリアは地上の闘技場に試合を見に来ていた。今日の対戦カードは今注目の騎士のようで、暇潰しには

なるだろう、とギリアは考えていた。

「にしても、噂の騎士様は女かよ」

闘技場で剣を振る騎士を見る。美しい金髪の背の高い女性だ。随分と長い剣を使ってるな、とギリアは試合を見た。

試合は圧倒的だった。長い剣を素早く巧みに操り、反撃の際も与えていない。まあ敵じゃないさ、とギリアは首を振る。

「なんせオレは剣じゃ斬れないしな」

全身堅い鎧で出来ているようなものである。ふと、試合から視線を放した先で、ギリアは少女の怒鳴り声を聞いた。

「だからチビって言ってんじゃねえよ！ 死なすぞ！」

何事かと目を向けた方には、白いドレスを着た高貴な雰囲気漂わせている美しい女性と可愛らしい小さな女の子に絡んでいる男たちがいちがいた。

「ナンパか？」

ギリアはそう呟いた。庇うように女性の前に出ている少女の怒鳴り声が辺りに響いているが、誰も二人を助けようとはしていない。女性も余裕の表情だ。なんだか奇妙な光景である。

「だから！ 俺たちはその後ろの女性に声をかけているのであって！ お前にじゃないんだよ！ なんでガキがこんなところに居るんだよ！」

「ガキだってエ！？ そんなに死にたいのかよデブ！ 体デカいからっていい気になるなよ羨ましいな畜生！」

絡んできていた男の言葉に、少女が怒鳴り返す。そんな光景を見ながらギリアは呟いた。

「つつかなんでオレの方に絡んでこないんだよ。なんだ？ 男どもは清楚な方が好みってか？ いやまあ、オレも男だったはずなんだがな……なんでオレをナンパしない！！」

そのまま、ギリアはその輪の中に飛び込んで、男の顔を力いっぱい殴り飛ばした。

「理不尽ッ!？」

と断末魔を上げ、男は吹っ飛んで行った。そのまま拳を握り直し、男の連れを睨みつける。

「な、何だっつてんだ!？」

「ついて行くつもりはさらさらないが、オレを真っ先にナンパしいとは、貴様ら万死に値する!」

「何そのめんどくさい理由ぶべら!！」

何か喚いている最中だった男を殴り飛ばし、そのまま流れるように男の連れを全員吹き飛ばす。全員吹き飛ばした後、両手を払い、溜息をついたギリアに向かって、女性が声をかける。

「ありがとうございます。どうも彼らは人語が話せないようで、私本当に困っていたんです」

笑顔でそう毒を吐く女性を見て、呆れ顔になっているギリアのふともも部分を少女が叩く。

「何突然入り込んできてるのよ! これからわたしがあいつらをぶっ飛ばそうとしたのに! ……背高いわね! 嫌味ツ!？」

「キヤラ濃いなお前ら」

女性はそう言うギリアの手をそっと握ってきた。間近で見て、やはり貴族の令嬢のような顔立ちだとギリアは思った。

「何かお礼をしたいので、これから一緒に食事でもどうですか? そちらのお嬢さんも」

「誰がお嬢さんよ! わたしは19よ!」

「嘘だろ!?! オレより年上!?!」

「まあ、私と同じ年ですか?」

「うわ、ムカつくわねあんたら」

そう言いながら、三人は歩き出した。戦闘を姿勢よく歩く女性が、二人に自己紹介をする。

「私はロベリア・エリヌスと申します。お忍びでこうして旅をしているのです」

「忍ぶ気ゼロだな」

「いえいえ、まさか、ただ見つかったても、私の従者ならば何とかし

てくれるだろうと信用しているだけです」

「さよけ。オレはギリア・レプタンサ。ギリアでかまわない」

そう名乗ったギリアの横で、少女が声を上げる。

「しょうがないから教えてあげるわ！ ヴァイオレット・ドッグト
ウスよ！ 『カタカゴ』のヴァイオレットとはわたしの事よ！」

「かた……かご？」

「肩がこっているのでしょうか」

「違うわよ！ くっ、まさかあんたたちがわたしを知らないほどの
モグリだったなんて、悔しいわ！」

「あ、着きました。こちらです」

「無視なの！？」

そう叫ぶヴァイオレットをスルーして、ギリアとロベリアは店内
に入った。

「喫茶店みたいだな」

ギリアは呟く。その後ろからヴァイオレットが付いて来て、店内
を見回すと、豪華と溜息をついた。

「ガキには早いんじゃないのか？」

「あんたからかってんの！？」

適当な席に座り、注文を済ませ、ロベリアは切り出した。

「先ほどはありがとうございました。私の旅の目的をあんなところ
で邪魔されては堪りませんからね」

ギリアは手を横に振りながら苦笑した。

「構わねえけどな、えっと、ロベリアの旅の目的ってのはなんなん
だ？」

「私の目的、それは恋をすることです！」

急に握り拳を作って叫んだロベリアに混乱しながらヴァイオレッ
トが言う。

「はあ？ 恋？ あんた何言ってるのよ。従者との旅なんて言うか
ら、わたしはてっきり逃避行かと思ったのに」

その言葉に、ロベリアは首を左右に振って否定した。

「それはもう試みたのですが、私の従者は私にとってそういう対象にならなかつたのです」

「うわあ、従者さんお気の毒ー」

何やら気の毒そうな視線で虚空を眺めるヴァイオレットに、ロベリアは首をかしげた。

「何を心配しているのですか？ 私の役に立とうとしたのだから、従者としては幸福でしょう？」

「すげえ理論だな。あんた属性『傲慢』なんじゃねえの？」

ギリアが苦笑しながら言うと、ロベリアは心外だという顔をした。

「まさか、私がそんな野蛮な属性に見えますか？」

「違うのかよ」

もちろんです、とロベリアは頷いた。そのまま右手を祈るように胸元へ寄せる。

「見てわかりませんか？」

「だから『傲慢』だろ？」

「『傲慢』でしょ」

ギリアとヴァイオレットが頷き合う。

「違います。『高貴』ですよ『高貴』」

「『え〜？』」

「何ですか二人して不満そうな」

だって、と顔を見合わせる二人にロベリアが尋ねる。

「そういう貴女方の属性はいつたい何なんです？」

「オレは『色欲』だよ」

「だからそんな品の無い格好してるのね。まったく、これだから大きい女は」

ヴァイオレットがギリアを睨みながら言う。

「そんな恰好をするなんてプライドが無いのね」

「自信があるんだよ」

舌打ちをしたヴァイオレットは、大きく反らしたまな板のような胸に手を添えて自分の属性を言おうとした。

「わたしは」

「『小人』か？」

「違うよ!!!」

テーブルを叩いて否定するヴァイオレットの前にケーキが置かれ、ヴァイオレットは喜んでそれを頬張った。

「わっかりやす……」

「ハッ!? しまった!？」

そんなやり取りを見ながら、ロベリアは上品に微笑んだ。

「微笑ましいですね。相性がいいみたい」

そんなわけがない、と二人は同時に否定する。それをまた面白がるようにロベリアは微笑む。そうしているうちに、店の扉が開く音が聞こえ、誰かが近づいてきた。

「ロベリア様、こちらでしたか」

「早かったわねベロニカ。もう少し掛かるかと思っていたのだけけれど」

「ロベリア様が見ているかもしれない戦いで、私がそんなみっともない事が出来るはずがないではありませんか」

ギリアは声をかけてきた方を見た。そこには、先ほど闘技場で戦っていた騎士が立っていた。

「噂の騎士様だなあオイ」

ヴァイオレットの頭を軽く叩きながらギリアは言った。

「邪魔よギリア……本当だ。地上の優勝候補だったっけ？」

「ロベリア様、こちらのお二人はいつたい……」

ギリアとヴァイオレットの方を見て怪訝そうな顔をしたベロニカに、ロベリアは言う。

「この方たちは、先ほど私を悪漢から助けてくださった方々です」
その言葉を聞くと、ベロニカは急に姿勢を正し、二人に頭を下げた。

「ロベリア様を助けていただき、本当にありがとうございます。」

私はロベリア様の騎士、属性は『忠義』で、名はベロニカと申しま

す」

「はん、堅苦しくて好かないねえオレは」

「そうかしら、わたしからしたら、あんたの百倍好感が持てたわ。
ヴァイオレットよ」

「『小人』のな」

「違うわよ!!」

ベロニカは、そのままロベリアの背後に立った。ギリアは水面の様に静かだと思った。ロベリアと話をしている時と、ギリアとヴァイオレットを見ている時の温度差が凄まじい。ま、初めて会ったばかりだしな、とギリアは首を振った。

「ギリアだ。お堅い騎士様」

それに対し、ベロニカはちらりと何の感情も含まない視線を向けることで答える。するとロベリアは立ち上がり、ギリアとヴァイオレットに言った。

「それじゃあ、私たちはもう行きますわ、ここの分はお礼として私が出しますので、ゆっくりして行ってくださいね。あ、でも、早めに帰った方が良くもありませんね。最近何やら物騒なようですし」
そのままベロニカを引き連れてロベリアはお金を置いて扉の方へ向かった。そこで一度止まり、ゆっくりと振り返り、綺麗な笑顔で「助けてくださったとき、ギリアさん、とっても素敵でしたわ。もしかしたら、私の恋のお相手は貴女なのかもしれませんね。では、いずれました」

そう言い残し、二人は去って行った。

ヴァイオレットは、テーブルの上に残されていたケーキを全て食べ終わると、わたしも行くわ、と立ち上がった。

「何でわたしには惚れなかったのかしら、妙にムカつくわねえ。まあいいわ、それじゃあ、次会う時が来たらもう少し貞淑になっている事を祈ってるわ」

「オレは十分貞淑だ。あんたこそ、背が伸びると良いな」

「うっさいわね!」

そのまま駆けて行くヴァイオレットの背中を見送った後、ギリアも店を去った。もう夕暮れ時だ。随分と早いな、とギリアは笑った。明日はまた試合がある。とっとと帰って寝てしまっのも良いだろう。そう考え、ギリアは帰路についた。

1章3話 『道德』の万両

『近年急激な速度で砂漠化が進み 地球温暖化が 』
懐かしい夢だ、テレビで流れるニュースを見てギリアは思った。

このニュースは、ギリアが自分の居た世界からいなくなる日の朝に見た物だっただろうか。その後すぐに学校に向かったのだ。近くの公立の高校に通っていたギリアは、自分の教室に向かった。そこでは朝早くから来ていた生徒たちが話をしていた。

「いいな〜やつぱり彼氏がいると違うね〜」

「か、彼氏じゃないって!」

「恥ずかしがることないじゃない。あんなに仲の良い関係でただの幼馴染は無いでしょよ」

教室の前の方で、女子たちが集まっているのが見えた。その頃はまだ男だったギリアは、その集団をちらりと見ただけで、そのまま自分の席へと向かった。

どうやら彼女たちの中心に居る少女は、自分の幼馴染から贈り物をもらったらしい。ギリアは自分の前に座っている、その少女の幼馴染にして、ギリアの親友、坂野目勇樹を見た。

「彼女、ずいぶん喜んでるみたいだな」

「そうだと良いなあ……って、か、彼女じゃないよ!」

「否定すんなよ、満更じゃないくせに。良いじゃねえか、あんな可愛い彼女が出来て」

「だから俺たちは!」

「はいはい、わかったわかった」

そう苦笑して、ギリアは席に着いた。そこまでは普段通りだったろうか。それから確か……。

放課後に、一人で歩いていたら。前の方から、車がやってきて……車? ギリアは夢の中にも関わらず頭を抱えた。本当にそうだった

ただらうか。車に引かれてこちらの妙な世界に生まれ変わったのだただらうか。

まあ、どうでも良いか、とギリアは首を振った。そんなもの、わかったところで意味はない。帰り道も無ければ、帰るつもりも無いのだから。

そうしてこちらの世界に来て、両親がすぐに死んだ。ギリアにはさすがにシヨックだったが、周りの大人たちの反応が、この世界では、人が死ぬことは元の世界よりも忌避べきものではないという事を教えてくれた。

魂と呼ばれるものは、常に世界を循環しているから、たとえ誰かが無くなっても、その人との別れは永遠ではないのだと、そう教わった。

ギリアも最初は疑ったが、この世界では確りと確かめられるものとして魂が存在しているのだった。人間を形取る要素は、体と記憶と魂だと、昔女神様がそう決めたのだそうだ。口伝だから、どこまでが正しいのかはギリアにはわからなかったが、少なくともこの世界ではそれが常識らしい。

だからお前が死んでも、いずれどっかで生まれ変わるさ。村の大人たちにはそう言われた。それが常識なのだ。そう教わった。

そうして、その常識に乗っ取ったまま、一族はギリア以外壊滅し、ギリアは村を出た。世界は広がった。何しろ、この世界が生まれて数千年、未だに地図が完成していないのだ。それに話を聞く限り、この世界はどうかやら天動説で、しかも人間は女神様の手によって生み出されたらしいのだ。なんともおかしな話だと思った。しかしギリアは、それが常識なのだと自分に染み込ませた。

そうすると、この世界の冒険は随分と楽しいものになった。小さいころに夢に見た様なファンタジーの世界だ。楽しくないわけがない。

といっても、ギリアもまだまだ半人前なのだ。村や町をいくつか旅しただけなのだ。そこで知った。大罪宝具の話。「この国の闘技

場では、地上と地下の両優勝者の記念試合の時にのみ、人々の前に姿を現す武器がある」と。知り合いからそれを聞いたギリアは、喜び勇んで闘技場にやってきた。今のギリアにとって、強くなること、戦うことは快樂なのだ。随分昔と性格が変わったものだ、と自分でも考える。しかしこれがこの世界に適した自分の姿なのだろう。

ふと、親友の姿が浮かんできた。どうだろう、彼は今も元気にやっているだろうか。もう幼馴染の少女と結婚して、子供もいてもおかしくないのだろう。ギリアは自分にしては珍しく、そう願わずにはいられなかった。

「妙にセンチメンタルだなあオイ」

目をさまし、自分に突っ込みを入れる。自分はこんな人間だっただろうか。軽く舌打ちをして起き上がった。

今日は試合の日だ。ギリアが準備を整えていると、先日ここを訪れた運営側の男性が、再び訪れた。

「おはようございますギリア様。お元気そうで何よりでございます」

「そう見えるならテメエの目が腐ってるんじゃないかねえの？ それで？

今日も不戦勝か？」

「いえいえ、今日は予定通り試合がございます。良かったですね、対戦相手が狙われなかったようで」

「そうだな……」

「どうかなさいましたか？」

男が窺う様に聞いてくる。それに対し、ギリアは何でもないと首を振った。

「テメエがいつもオレを欲情した目で見るから、つい気になっちゃまってな」

「ああ、ばれてしまいましたか」

「……ッチ、さっさと行くぞ」

ギリアがそう言うと、男は恭しく頭を下げ、

「了解いたしました。それでは付いて来てください」

と歩き出した。

『まずはこちら！ 機族にして大罪人『色欲』の称号を持つ美女！ そのパーフェクトな美貌と、アンバランスな喋り方に、闘技場内でもファンが急増中の選手！ ギリア・レプタンサ選手！』
「ほんとかよ」

先日自分の初戦と同じ実況者の声に呟いて、ギリアはフィールドに立つ。と同時に歓声が上がった。その歓声を背に、ギリアは仁王立ちで対戦相手の登場を待つ。すると実況の女性は、今度は相手側の紹介を始めた。

『対するは！ 遙か極東からの挑戦者！ 10戦全勝！ ただの八ゲじゃねぞこいつは！ 属性『道德』！ 万両選手！』

向かい側から現れたのは、先端に鈴の取り付けられた木で出来た杖を持った、寺の坊主の様な格好をした中年の男性だった。

「道德ね……小学校以来だわ聞くの」
呟いて、現れた相手を睨む。10戦全勝の相手なのだ。油断はできない。両者睨み合っている状態で、実況の声が会場中に響いた。
『それでは……試合開始！！』

その声と同時にギリアは相手の懐に飛び込んだ。そのまま右手を変形させて、力いっぱい相手を殴る。それに応じようと、万両が杖を構え、りいん、と鈴の音が鳴る。

「先手必勝！ 出し惜しみなした！ くらいな！ 淫凸！！」
渾身の力で叩き込んだ淫凸は、しかし万両の体に触れることなく空中で停止した。その事態に驚きながらも、すぐさま蹴りを叩きこむが、それも直前で停止する。

「『道德：親切心』」
りいん、と鈴の音が響く。そして攻撃は万両に届くことなく停止した。万両は瞳を閉じたまま、ゆっくりと杖を振っている。

「あなたは、自分よりも年上の人間を、躊躇も無く殺そうとしたな

？ 不徳成敗、神の裁き！」

「なっ！？ があああああ！！！」

突然、ギリアの体を激痛が走りぬけた。何とか歯を食いしばり距離を取る。

「何だ今のは……：てめえ仏教徒じゃねえのかよ！」

その言葉に万両は首を傾げた。まるで何を言っているのか分からないという顔だ。

「何を言っている？ 我々は皆女神様を信仰しているではないか」

「しまった！ ここ異世界だからそう言うの無いのか……」

「何を訳のわからないことを。まあいい、貴様が己の行いを認めているならば、神は貴様を罰してくださるだろう。前回あの大男を殺したな？」

舌打ちをして、ギリアは答える。

「それがどうした！」

「そこに少しでも罪悪感を覚えているのなら、貴様はその分の天罰をくらうというだけさ。不徳成敗、神の裁き！！！」

10メートル以上離れた先で、万両が瞳を閉じ、りんと鈴を鳴らす。すると再びギリアの体を激痛が走る。痛む箇所を押さえるが、傷口が無い。ギリアはそのまま膝をついた。息も絶え絶えになりながら、ギリアが言う。

「な、クソツたれ、妙な杖が原因か……」

「その通り」

万両が杖を少し揺らしながら言う。その時も鈴が鳴るが、ギリアの体に激痛は来なかった。

「宝具、か？」

「ええ、属性『道徳』の宝具が一つ『罪と罰』だ。これを私が目を閉じ念じ、一度りんと鳴らせば、貴女は自分の罪によって殺される」

「10戦全勝ね、テメエの方がよっぽど殺してそうじゃねえか」

「いいえ、これは神の裁きなので、私の不徳ではない！」

『出たー！！ 万両選手の神の裁き！！ この技ひとつで今まで勝ち残ってきた選手です！！ この地下闘技場で戦う人間は、ほぼ全員と言っていいほど誰かを殺した事がある人間ばかりです！ それは罪として咎められない場合も多いけれど、罪悪感に残るもの！そこを狙う、卑怯な宝具だー！！！ しかし私、ギリヤ選手の叫び声に奇妙な興奮を覚えずにはいられません！！』

「何言ってるんだか……：しかしまあ、なるほど、ね。人を殴るのは不徳ね。殴ることに罪悪感が無い人はどうなんだよ」

その言葉に、万両は用意していたかのように、にっこりと微笑む。「無くせるのか？ 罪悪感を」

言われ、ギリヤは黙った。そう簡単に無くせるものではない。むしろ無くそうなどと意識してしまえばより一層心の中を占めるのだ。その事に気が付いたギリヤを見て、万両はそうですと頷き話を続ける。

「無くせない。それに、もしも最初から感じない人がいたとしても、問題ではない」

そう言いながら再びいんと鳴らす。

「何故こうも長々と話すか、不思議か？ 意識させることで威力が増すのだ。それに、罪悪感など関係のない罪もある」

万両はゆっくりとギリヤに近づき始めた。

「例えば、多くの異性と関係を持つことなんか最たるものの一つだな。何せ、7つの大罪の一つだからな。それは大きな罪だろうさ。まあいい」

そう言うと、万両は杖を高く掲げ、地面に叩きつけた。そして鈴の音が響き渡る。

「思い出すがいい！ 今まで最も残酷だった殺人を！ そしてその罪で死ぬがよい！！」

「がああああああああああ！！！！」

『決まったー！！！！ しかし良い声ですね』

万両はそつと杖に手を当て、実況席の方に振る。

「『道德：純粹』さつきから貴様の邪な
『本当にすいませんでした』」

激痛の中で、ギリアは思い出す。一番の虐殺、最初の虐殺、一族殺し。最大の不徳だ。その罪悪感がギリアを締め上げる。さらに、元々ギリアは人を殺してはいけないという教育を受けて育ったのだ。いくら慣れたとは言っても、罪悪感など消えるものではない。しかし。

『立っている！ ギリア選手まだ立っています！！』

「知っている、オレは、教わったぞ。この世界は、魂が循環するのだから、悲しまなくて良いんだったな」

思い出す。一族の、村の人間に言われたこと。たとえお前が死んでも少しも悲しくなどない、と。ならば、心を痛める必要などないのだ。ギリアは前を向いた。

「この世界では、むしろ、そっちが常識！！」

「ああ？ なんだ貴女も人殺しは不徳ではないと言えてしまう性質か」

「そんなん、知らねえよ。ただ、罪悪感は無いつてだけだ」

万両はその言葉に、悲しげに深く溜息をついた。

「ああ、ならば貴様を確実に殺そう。必殺だ」

べえ、と舌をだし、嘲る様にしながらギリアは言った。

「今度はどんな道德だ？」

「純潔だ」

何を言うのかと首を傾げるギリアに万両が言う。

「純潔。生涯を、一人の人に捧げ通す道德。浮気や多気は不徳とされる。なあ『色欲』、あんたはどれだけ不純なんだろうな」

その言葉に、吹きだすようにギリアがお腹を抱え笑い出した。

「ばーか、『色欲』が、性欲に罪悪感なんて感じるわけないだろ。

あんたのその防御。突然の出来事には効かないんだろう？」

ギリアは確認を取る。今度は、万両が侮蔑の表情を向ける。

「たとえそうだとしても、貴様は死ぬさ。さつきも言っただろっ、7つの大罪と。これは世界に認められた大罪ぞ。犯すものは皆この属性『道徳』に裁かれる!!」

『確かに『色欲』は大罪!! それならば、先ほども言ったようにその関係の多さに罰せられるはず!!』

その声を背に、右手に淫凸を携え、笑みを浮かべギリアは踏み出した。

「無駄なあがきを! 必ず殺す!! さあ思い出すがいい! これまで貴様を抱き、そして貴様に捨てられていった男たちの顔を!! 死ね大罪人!」

万両は杖を振り上げ、瞳を閉じ、心の中で強く強く念じながら、思い切り地面に叩きつける。りいん、と辺りに鈴の音が響いた。ギリアは地面を踏みしめ、そして。

「ッ!!」
喉を潰したような悲痛な叫びが一面に広まった。その音と共に再び杖を叩きつけ、鈴を鳴らす。

「ッ!!」
鳴らす。瞳を閉じ、ただ捨てられた男のことを思い、鳴らす。強く叩きつけ、鳴らす。りいん、りいんと、何度も鳴らす。

「ふん、やはり大罪人。しかしこうもあっけなかったか」
りいん、りいんりいん。そしてようやく杖を止め、目を開くと、眼前には満面の笑みで淫凸を構えるギリアの姿があった。

「なっ!?!」
「びっくりしたな?」

とっさに危険を感じ、万両は叫んだ。

「『道徳：親切心』ッ!!」

絶好のポジションで淫凸を振りぬこうとしながら、ギリアは口を開いた。

「実はオレな、処女なんだ」

『「嘘だろッ!?!」』

万両と実況の声が重なる。その様子に、舌をぺろりと出しながら、淫凸を万両にぶつけた。先ほどの様な、止められる感触はない。そのまま淫凸は万両の体へと吸い込まれるように衝突した。

「超秘密な、恥ずかしいし」

そう言つてニイッと笑うギリアの前、血を流しながら倒れる万両を見て、実況は声を上げた。

「勝者、ギリア選手!!!」

そのまま淫凸を解いた右手を掲げ、実況席の方を見る。思えば、ずいぶんと恥ずかしい戦い方をしたのかもしれない。そんなギリアに向かって、実況の女性は歓声を上げた。

「いやしかし、素晴らしいですね淫乱処女！ 私はもうこういうのが大好きで大好きで!!!」

「死ね!!!」

そう言い残し、笑みを深くしたギリアはその場を後にした。

1章4話 『色欲』のベルギア

「あなたは確か機族、でしたよね？」

前回連れてこられた店に二人、向かい合って座っている。テーブルの上にはケーキと紅茶が置かれており、他の客は見当たらない。ケーキに一口噛り付きながら、ロベリアの言葉にギリアは頷く。

「合ってるぞ。それが？」

「いえ、貴女の事をもっと知っておこうと思ひまして」

そうかい、と生返事しながら大きく口をあげケーキを食べる。

「敵の偵察か？」

冗談めかしてギリアは言った。するとやはりロベリアは心外だという顔で頬を膨らませ拗ねたように横を向く。

「ベロニカの為ではありませんよ」

「そうなんだろうな。ああ、可愛そうな騎士様」

「もう、からかわないでください。私もベロニカもそういう関係ではありません！」

そう言いながらロベリアは小さく一口分ケーキを口に運ぶ。少しの間味わう様に間をおいて、最初の質問に戻った。

「機族というのは、体を変形できるのでしたよね？」

ロベリアの言葉にギリアは少し考える。

「あ、そういう言い方でいいのか？ 良くわかんねえ。オレ達にとって、こうやって体を作りかえる事は常識というか、何ら問題なくイメージだけでできる事だったから、そんな詳しく知らないんだわ」

「はあ、そうなんですか」

そう言ってロベリアは少し考え込む。背に翼の生えた種族や、崩れやすい体の種族など、様々な種族が存在するが、それらのほとん

どは人型を基本としている。ロベリアはギリアを見た。機族というのは最早絶滅しているとまで言われている、非常に貴重な種族だ。その生き残りがこんな美女だったとは。ロベリアはギリアの全身を眺めた。

「なんだよ」

「いいえ、それでは、ギリアさんの好きなタイプとか教えてください」

「冗談とも本気ともつかないような言い方で尋ねて来るロベリアに、ギリアは怪訝な顔をした。そして先日言われた事を思い出す。

「あんた、恋をするために旅をしているんだっただな？」

それがどうしたのかという顔で頷くロベリアにギリアが聞く。

「何だってわざわざ旅をしてるんだ？ 手近に好きな人とかできなかったのか？」

「はい、どうにもときめかなくて」

「じゃあまだ時期じゃないんじゃないのか？」

「いえ、今が恋する時期なのです。結婚相手を見つければ……」

「ずいぶん飛んだな」

「そんなことはありません。恋をしなければ死ぬのです」

「どういう意味だ、と尋ねながら、ギリアは妙な話になったなど内心溜息をつく。

「私の実家では、結婚相手を自分で見つける決まりがあるのです」

ギリアは首を傾げた。その様子を見ながら、ロベリアはそのまま話を続ける。

「つまり一生を共にする配偶者を自力で見つけなければ一人前と認められないのです」

「はあ、なるほどねえ」

「生まれて20年経つまでに、自分の事を本当にときめかせる者と一緒にならないければ、属性「恋愛」の宝具の効果によって死ぬのです」

「は！？ うわあ、飛躍したなあ」

そんなことはありません、とロベリアは首を振る。

「ときめかねば死ぬ。いつたどこに飛躍がありませんか？」

「そこだよ、そこ」

「ときめきが足りなくなつて、脳が死んでいくという宝具らしいですよ。まあ、いいでしょう。そういう訳で、私はときめくために旅をしているのですよ」

「なるほどねえ、それで騎士様にはときめかなかつた、と」

「ええ、彼女は私とは対等ではないので」

ああそう、とギリアは店の外を見た。そこではベロニカが周囲を警戒しながら立っている。

「それですね？ 今日お招きした理由なのですが。私は先日、貴女にときめいてしまいました」

「ああ？ 助けられたからつてときめくとか、短絡的すぎねえか？」

「いえ、そこではほんの少しときめきましたが、まだまだ至りませんでした」

「なんつかム力つくな」

再び小さく一口食べ、間を置くロベリアをギリアはじりと睨み付けた。

「先日の試合の時でした。私、あの試合見に行っていたのですよ？」

「へえ、恥ずかしいところ見られたな」

いえ、と首を振るロベリアは、何か思い出すかのように瞳を閉じ、両頬に手を添えた。

「あの試合を見て、貴女を見て思いました。ああ、貴女の初めてが欲しい、と」

「は？」

「この感情、これが恋でなければなんというのでしょうか！ これはもう恋です！」

「恋じゃねえアホだ！ ツクソ！」

ギリアは席を立ちあがり、外に立っていたベロニカを呼ぶ。店に入ってきたベロニカは、何事かと二人を見ている。

「テムエの主なんか病気だ！ やべえ！」

その言葉に、ベロニカは持つていた剣の柄に手をかけた。

「貴様！ ロベリア様を愚弄するか！！」

「テムエもかめんどくせえな畜生！！」

ギリアはロベリアの顔を掴み、無理やりベロニカの方へ向ける。

「ほら！ テムエの騎士様だ！ 騎士だってんだからあいつも処女

なんだろ！ あいつで良いだろ！」

「何を言い出すかと思いましたが、ベロニカは処女ではありませんよ？」

ギリアは今日一番驚いたような顔をしてベロニカを見た。

「……何ですか？」

「……いんや、何でも」

「私が頂きましたの。ですがそれでもときめかなくて、残念ながら」

ギリアは憐みの視線をベロニカに向ける。そんなギリアに向けて、

ロベリアは招く様に両手をつき出した。

「そういう訳でロベリアさん、さあ、私と一つになりませんか？」

「なんねえよ！！ その宝具の効果解いたら良いだろうが」

「それが出来れば苦労はありません……先代がこの効果を受けて以来、我が一族は代々おの宝具の効果に悩まされ続けてきたのです。

それこそ、言い訳としてこんな仕来りを作ってしまう程に。さあ、

ロベリアさん」

「あー、断るって」

その返答を聞くと、ロベリアは心底意味が分からないという顔をしました。

「『色欲』なのに乗らないのですか？ なんだかギリアさんって『色欲』という割には清いですよね」

そう言われ、ギリアも黙る。そもそも自分の属性が何故『色欲』

なのかもわかっていないのだ。自分の中では、快樂に繋がる事があるのだから、処女でも良いかと納得しているのだが。

「ふうん、そういう事でしたら、今回は見逃して差し上げましょう。」

今後ゆつくりと私色に染まるように」

そう言うと、ロベリアは席を立つ。帰るつもりなのだろう。ギリアはなんだか勝ち逃げされたような気分になった。

「では、今回は良いときめきを、ありがとうございました」

そう言い残し、ロベリアはベロニカを連れ、去って行った。ギリアは脱力したように椅子の背もたれに寄り掛かった。

「だあー。自分から攻めてく方が好きとかってただけだと思うんだけどなー」

「それでは次の試合に参りましょう！！　まずはご存じ！　『色欲』の大罪人ギリアだー！！」

いつものように、ギリアは相手側に目を向けた。右手は早々に変形させているので、立っている時の姿勢が若干崩れている状態となっている。相手側には、一人の女性が立っている。黒く長い癖のある髪の毛の美しい女性だ。女性は髪をさらりと撫で、ギリアを見返した。『続いて紹介するのは、何の因果か、こちらも『色欲』！！　戦いぶりを見るにこちらの方が女性としての武器を十分に使っている気がするぞ！　『色欲』のベルギア・ステルだ！！』

「まさか自分と同じ属性が出てくるとは、予想外だな」

ギリアの呟きに、ベルギアと呼ばれた女性は少しイラついたように反応した。

「同じ……？　私としては何であなみたいなのが『色欲』で、しかもそのトップの大罪人なのかわかんないのよあ？　同じにしないでほしいわあ」

ベルギアは両腕を真っ直ぐ前に伸ばし、構え、叫ぶ。

「さあ、始めましょうよ！　ここで私があなたを殺せば、晴れて大罪人の名は私の物なの、待ちきれないわあ！」

その言葉に反応するかのようになり、開場は一瞬静まり返り、実況の音が響く。

『それでは、試合開始!!』

ベルリアは、両手を開いてギリアの方へ向けたまま、じつとギリアを見ている。出方を見ているのだろう。ギリアは右腕を持ち上げ、肩で構えた。そのまま駆け出し、右腕を叩きつけるように相手にぶつける。

「それがあなたの宝具なのかしら？ 確かに硬くて太くて大きいけど、私を満足させるにはまだまだ単純すぎるわ」

「いや、オレの宝具ってわけじゃないが……つと!」

ギリアが淫凸と呼んでいる、全長2メートル程度の金属の塊を避けたベルギアは、両腕を自分の体の左右へ大きく広げ、叫ぶ。

「私を守ってくださいいな、『夜の蝶』!」

広げた両手の先から、それぞれ2匹ずつ、合計4匹の色鮮やかな翅を持つ蝶が飛び立つ。その蝶は、ひらひらと漂う様にベルギアの周りを飛び始めた。

「さあ、行きますわよお。そおれえ『淫獣』!」

再びベルギアが両腕を振ると、今度は黒い影が地面に降り立った。全身黒い姿の獣は、顔らしき部分をギリアに向け、唸るように身を低くした。

狼みたいだ、とギリアは思った。完全に狼の形をしているわけではない。全体的に、狼よりも若干丸いフォルムだが、それでもギリアは第一印象で狼の様だと思った。

『宝具の二つ使用だ! これは精力を使う! さすが『色欲』と言ったところだろうか!』

実況の声を聞きながら、ギリアはベルギアの二つの宝具を見た。『夜の蝶』と『淫獣』はそれぞれベルギアの周りを動いている。

宝具は、大きく分けて二種類存在し、一般宝具と特殊宝具に分けられる。一般宝具とはその属性の人間誰もが使える宝具の事であり、特殊宝具とはその属性の人間の中でも限られた、決められたものしか使えない、いわば専用宝具である。ギリアが今求めている大罪宝具も、この特殊宝具にカテゴライズされる。

宝具の使用回数は無制限ではない。それは、その人の精力に依存する。

『ようするに気合次第でどうにでもなってますが！ それでも二つの宝具を同時に使用するという事は、凄まじいほどの精力を必要とします！』

「あなた処女なんですってねえ。『色欲』の加護、御存じじゃない訳じゃないでしょうに」

ベルギアは腰に手を添えながら言う。加護、と言われギリアは考えた。

加護。自分の属性によって得られる利点。属性は一人ひとつなのだから、よほど何かが無い限り加護もそれに対応したもののみが与えられる。例えば、ギリアがここで最初に戦った大男は、『暴食』の属性で、その加護は食べるほどに自分の理想の体へと近づくというものだった。

そういった具合に、何らかの利点があるのだ。

そして、『色欲』利点とは。

「精力のストックかよ、オイオイ！ わざわざ二つ同時使用の為にいったい何人とやったんだよ。燃費わりいなあ！」

「それこそが『色欲』の真骨頂じゃない！ 何人分もの精力を体の中で貯めて、大量の宝具で徹底的に叩きのめすのが『色欲』の戦い方でしょう？ それなのにまさか、頂点である大罪人のあなたがその加護をまったく利用していなかったなんてねえ」

呆れたようにベルギアは言う。それもそのはず、この世界では、自分の属性とその加護を理解し、利用するなどという事は基本中の基本。戦う人間がそれをできないなどという事は、とても自慢できるものではないのだ。

『色欲』の加護とは、自分と交わった人間の精力を自分の中にストックしておき、自分の物として使う事が出来るという、タンクの役割を果たすものである。なので当然、ギリアはその加護の本領を發揮する事が出来ない。

「喰いちぎれ！ 『淫獣』！！」

『淫獣』は素早く跳ね、ギリアに飛びついてくる。それに合わせるように右腕の淫凸で打ち返すが、地上で体勢を立て直し再び突進してくる。

「めんどい！」

淫凸を『淫獣』に突き立て、貫く。するとあっさりと『淫獣』は黒い霧となって四散した。

「ああ？」

「あゝあ、壊れちゃった。じゃあもう一度お『淫獣』！！ 喰いやぶれえ！」

再び現れた黒い影が、ギリアの背後で獣の形を取り、そのまま襲い掛かってくる。

「クソツたれ！」

獣の狙っている部分を金属に変えて凌ぐ。『淫獣』は金属に変わった腰の部分に噛みつく様な動作をして、しかし喰いちぎることはできなかった。

「まったく潰れる！」

そのまま『淫獣』を無視し、ベルギアに向かって淫凸を振り下ろす。周りでは相変わらず派手な色の羽の蝶々が舞っている。

「無駄よお！」

振り下ろされる淫凸の軌道上に、『夜の蝶』が飛び込んでくる。

淫凸と『夜の蝶』の衝突の瞬間、強い衝撃と共に淫凸が弾き返された。

「こっちは防御か！」

「そうよお、そっちはボディがから空きね！」

そう叫び飛び込んできたベルギアに、ギリアは反撃に入るが、浮かせた足と地面の間に『夜の蝶』が舞い込み、その衝撃によってギリアのバランスが大きく崩される。そこに『淫獣』が駆け寄ってくる。狙いは未だ地面についてギリギリバランスを取っている右足だろう、と判断したギリアは、右脚を金属に変え防御を図る。はたし

て『淫獣』は、金属の上からギリアの右脚に噛みついた。痛みはまるでない。しかし大きくバランスを崩してしまっている。

眼前に目を向けた時、そこにはベルギアが迫って来ていた。

そのままベルギアは、ギリアの腰を両手で優しく抱き寄せ、そつと唇を重ねた。

「んっ!？」

「んっ、ふふ」

数秒の間、無音の中で口づけ末、ベルギアはゆっくりとギリアの唇から自分の唇を放した。ギリアはベルギアを突き飛ばした。

「な、何を……ぐっ!？」

突然、爆発音と共に体の中で激痛が走る。痛む位置は腰と右脚だ。突然のことに悲鳴を上げながら、ギリアはよろけた。

「ふふ、私の『淫獣』は、相手の硬さなんて関係ないのよう」

視界が揺らぐ。小さいながら体の中で爆発が起きたのだ。その地点は最早ぐちゃぐちゃだろう。そんなギリアの様子を見て、ベルギアは妖艶な笑みを深くした。

「『淫獣』が噛みついた位置には印が残るのよ。私がキスするとそこが内側から爆発するの。もちろん硬くなければ、『淫獣』だけでも噛み切れるんだけどねえ」

つ・ま・り。と唇に指を添えながら囁くように言う。

「攻めの『淫獣』と守りの『夜の蝶』で、今の私は無敵。精力が果てるまで決して負けないわあ。さあ、大罪人の称号、頂こうかしらあ？」

1章5話 男の砲台

「どう見る？」

試合を見下ろす形で観客室に座っていた、精悍ながらも上品さの漂う顔立ちをした金色の髪を持つ男性が言う。それに対し、横に控えるように立っていた、端正で中性的な顔立ちの漆黒の髪を持つ男性が答える。

「現状を見ればベルギア様が有利ですが、しかしギリア様も大罪人の一人として数えられる御方で御座いますので、私にはどちらとも言う事が出来ません。が、しいて言うのでしたらギリア様でしょうか」

「なるほどな。お前はあの小娘に誘われたこともあったしな。なあヒース」

質問に答えた、ヒースと呼ばれた男が首を振る。

「あれは誘われたというよりも、社交辞令のような物でしょう。ギリア様はどうやら、そういった行為に及ぶことを忌避しているように感じられます」

「そうだとしたら自己矛盾だな。属性とも服装とも釣り合わない」「ジア様はどう考えていらっしやいますか？」

ヒースにジアと呼ばれた男は、横に控えるヒースを見ずに言った。「何か切り札があったとしても、今のままじゃどちらも『色欲』の大罪人として力不足だな。俺と戦うまでも無い」

そのジアの言葉に、ヒースは恭しく頭を下げる。

「さすがはジア様。傲慢でいらっしやる」

「そう褒めるな。それよりも今は『嫉妬』の方が気がかりだ。『暴食』『色欲』『憤怒』『怠惰』『傲慢』『強欲』の6つの大罪人はそれぞれ判明しているというのに、『嫉妬』だけは未だに空席だ」

「属性が『嫉妬』の方は存在するのですが、大罪人が選ばれないのですね。ジア様の代では7つの大罪の全てが揃うのではないかと、我々も期待していたのですが……」

「揃うさ、俺がそう決めたのだ、そろって貰わねば困る。しかし現れた時、最も脅威となるのも『嫉妬』だろう。あれは厄介だと聞いている」

「『嫉妬』の大罪人とは、そこまで警戒するほどの者なのですか？ ヒースは表情を変えずに疑問を口にする。その言葉に、ジアは苦笑と共に答えた。

「『嫉妬』は何も持たない者の為の属性だ。何も持たないがゆえに、他の物を見て大いに嫉妬する、そんな連中だ。古来より、そういう何も持たない連中は、いざという時怖いものと決まっているからな。何もしようとしないう『暴食』や『怠惰』、城に籠りきりの『強欲』と比べても危険だ。ましてやそこで苦戦している『色欲』とは比べるまでも無い」

「そうでございますか。ならば我々は、『嫉妬』が大罪人となれるよう準備を行いますので」

フィールドで右脚の爆発によってよろけているギリアを見ながら、ジアが笑う。

「それは構わないが、本来の仕事を忘れるなよ？ お前は今はこの運営の人間だろう」

「それでは私はそろそろ、それを忘れないために仕事に戻りますので」

そう言い、頭を下げたヒースは、ジアの横から一歩下がり、観戦者の人ごみの中に消えた。

『ギリア選手とベルギア選手のキスだー！ ギリア選手、ベルギア選手の宝具の前に防戦一方です！』

「全然防戦一方じゃねーつつつのッ！」

先の攻撃により内部が爆発した腰の部分を、無理やり金属に変えてカバーしながら地面に立ったギリアは、同様に爆破された右脚を無理やり地面に踏み込み、ベルギアを睨む。

「ほら見るよ、超余裕！ きひ！」

そんな無意味な強がりを見せているギリアに、心底あきれ返った様子でベルギアは首を振った。

「シヨックだわあ。私たち『性欲』の代表があんたみたいな馬鹿だったなんて」

『淫獣』と叫んだベルギアの横に、黒い影の獣が待機するように座り込む。その頭を撫でながら、ベルギアは続ける。

「まあいいわ。今負けを認めるなら生かして返さないことも無いわよ？」

「つつかオレが勝つから」

「あつそ、『淫獣』！」

右手をギリアの方へ向けるベルギアの動きに合わせて、『淫獣』はギリアの元へと飛ぶ。しかしギリアは、噛まれる部分を金属に変え防御するだけで、他に何の抵抗も無く『淫獣』に噛まれた。

「ならさつさと倒れちゃいなさいよう！」

そう言い、ベルギアはギリアに再びキスをした。体を密着させ、相手の体温を直に感じる。ベルギアのもっとも好きな時の1つだった。性格は残念だったが、素晴らしい容姿の少女。彼女を自分のキスによって摘み取る事が出来る。その興奮と快楽に酔いしれた。

ギリアは一つ、上手くベルギアを倒すアイディアを思いついていた。前にここで戦った二人は、それぞれ防御面でもそれなりに秀でていた。その打ち破り方は、力押しか、不意を衝くかだ。噛まれた部位を内側まで金属に変化させて、相手のキスに備える。

唇が重なり、正面から向き合う形で体が密着する。その瞬間だった。ギリアは自分の下腹部に巨大な杭を自らを貫く様に発生させ、そのまま相手を穿とうとする。

「ッ！？」

届く寸前にそのことに気が付いたベルギアが、ギリアの体を放し
後退し避けよとする。が。

「間に合わないッ!」

と、そこにひらりと一匹の蝶が舞い降りる。その蝶はベルギアと
杭の間に割り込むと、杭の動きを止めた。

「自動操縦かよ!」

「やってくれたわね! でも無駄だったみたいねえ! 爆破しなさ
い!」

同時に、金属に変えたはずの部位が破壊され、ねじ切られたよう
な直接的な痛みがギリアの体を支配する。

「私にはよくわからないけど、そういう防御は無駄よお! 『淫獣』
の牙は何だつて食い破るのよ!」

その言葉を耳に聞きながら、ギリアの体はゆっくりと地面に倒れ
て行った。

ゆっくりと地面に倒れていくギリアの体を見ながら、ベロニカは
ロベリアに言う。

「ギリア様の負けのようです。ロベリア様の期待には答えられな
かつたようですな」

「さあ、どうかしら」

「随分と、期待なさっているようで」

観客席の中、試合を見ながらロベリアは笑う。

「それは嫉妬かしら?」

「……いえ」

「そう、なら良いのだけれど。ええ、期待してるの。私は彼女に、
ときめかされることを」

「しかし、負けてしまったようですが」

「まだ負けと決まったわけじゃないわよ。ほら、立ち上がった」

二人の視線の先で、震えながらもギリアは立ち上がった。それを

見ていたロベリアは深く微笑む。

「そう睨まないの、ベロニカ。優勝者同士の最後の試合で、貴女と対戦する相手かもしれないのだから」

「あの硬さが敵なのかとも思っていました。宝具でどうとでもなるでしょう」

「優勝者同士の試合に出るのがあの女ア？ その言葉は聞き捨てならないわね」

横に座っていたヴァイオレットがひよっこりと顔を出す。

「優勝はこのわたしと決まってるんだから！」

「あらヴァイオレットさん、大会に出ていらっしやったのですか？」

「なにい！？ そこからか！？」

両腕を上げて威嚇するヴァイオレットに微笑みながら、ロベリアは言う。

「今のところほとんどが不戦勝でしたか？」

その言葉に、ヴァイオレットは上げていた腕をおろしにっこりと笑う。

「そうそう、だいたい全員何かで怪我しちゃってさ、まあちやんと戦った試合もあるんだし、良いじゃない」

「それは、幸運なことですね」

「でしょ！ 運も実力のうちなんて言うし。もうわたしの実力はどれくらいなんだろって自分でも怖くなるくらいなのよ！」

その言葉に、自らの不戦勝に罪悪感を感じていたベロニカは噛みついた。

「運も実力などという言葉は、弱者の生み出した妄想だ」

「言うねえ騎士様は」

ヴァイオレットは子供の様な笑みを浮かべベロニカを見る。

「騎士様も何回か不戦勝になってなかったっけ？ 運が良いのね、騎士様は」

そんな二人の様子を微笑ましそうに見守っていたロベリアがギリアの方を見て言う。

「二人とも。ギリアさんの方が何かするみたいですよ」

「さすがに我慢強いわねえ」

「見りゃわかるだろ。この流れ、どっからどう見てもオレの必勝パターンだよな」

「減らず口を！ 『淫獣』、何度だってやってやるわ！」

ギリアは自分の右脚を見た。体を支えるのには、少々心もとないかもしれない、そう考える。イメージしたのは鎧だった。自分の両脚を作り替え、鎧とする。妙にシャープな、尖った形状の鎧が脚部に装着されていく。関節部などは、曲がるという機能を付けず、ただ頑丈に設計した。太ももの辺りまで鎧が形成され、そこで一度止まる。まっすぐ伸びた脚は、関節部がちがちに固められているため、どうにも曲げることはできない。そういう設計だ。

ギリアはそのまま腰部部分を作り替える。自分の体をゆっくりと後方へ倒しながら、鎧を纏わせていく。そしてその鎧の腰の部分から左右に一本ずつ、合計二本の杭が地面に深く突き刺さる。今のギリアの様子は、リラックスしたような顔で、お気に入りの椅子に足を投げ出して座っているかのような、そういったものだった。

「構わないわ！ 噛みつきなさい！」

ベルギアの叫びに、『淫獣』がギリアに噛みつく。噛みつかれる部分を先に鎧に変えていくので、全身ほとんど鎧に包まれていく。数秒後には、首から下のほとんどが鎧で守られている状況となっていた。

「ふふ、体の中だけ壊されるっていうのは、妙な気分になるな」

「そうでしょうねえ。あとは私があなたに最後のキスをするだけであなたの全身が悲鳴を上げて、痛みには耐えられなくなって死んでしまっただけだよ」

「嫌な宝具だなオイ、それ、機族の体までぐちゃぐちゃにするのか」
安らかな表情で地下闘技場の天井部を見上げながらギリアは言う。

それに対し、ベルギアも微笑む。

「ええ、とつても強いのを作ってって言ったら、作ってくれたわ。本当はね、別にキスする必要はないのよ。相手の体内に私の精力さえ入れる事が出来れば何でもいいの」

「そんなにオレとキスしてみたかったってか？」

「ふふ、余裕なのねえ」

ギリアはベルギアを見て、大きく舌を出して下品に笑った。

「まあな、機族ってのは、体を作り替えている時に何があっても、戻ったらだいたい元通りになるんだよ。さすがに体から離れたりしたら無理だけど、体内の損傷だったらどうとでもなるんですよ」

「でも、痛みはそのまんまでしょう？」

「そりゃあな、それに、体の中で金属が飛び散ったら、他の部位を傷つけちゃう」

「あらあら、でも、手加減なんてしてあげないけどね」

「構わねえさ、さあ、キスしてくれよ」

今度はギリアは上品に微笑んで、せがんで見せた。気でも変になったかとベルギアは近づき、唇を重ねた。

「んっ」

今度のキスは、先ほどまでの様に触れるだけの物とは違い、長く続くものだった。ギリアは、自分の前歯を相手の舌がノックするのを感じ、それを受け入れる。そのまま舌に口の中を蹂躪されるのを、ギリアは笑いながら感じた。そしてその長い一瞬の後。

「んあ。ふふ、さあ、お終いね」

唇を放して、ベルギアが笑う。そのままそつとギリアの胸に自分の手を置いた。

「ッ！！」

激痛に、ギリアは逃れようと頭を振り、体をのた打ち回らせようとする。しかし関節を固定され、更に体の腰の部分を浮かせながら杭で固定されているギリアは、動かす事が出来ない。その中で、痛みに泡を吹きながらも、ギリアは笑っていた。

「あああああああああ！！」

ついには声を上げる。数歩離れたベルギアは、その声の中に、この状況に相応しくない色を感じ取った。

「悦んでるの！？」

大きくだらりと舌を伸ばし、体中の鎧を纏っていない部分を動かしながら息を吸うギリアをベルギアは睨んだ。

「ようするにさ、オレは、痛い思いをするのも、好きなんだわ」

「普通それだけで痛みに耐える！？」

「ほらオレ、『色欲』の、大罪人だし、快樂には、強いんじゃないかねえのん？」

そう言い、ギリアは右腕をベルギアに向けて伸ばす。両者の距離は数歩分。ギリアは真っ直ぐベルギアを睨みつけた。

「こっからがオレの番よ。ふふ」

ギリアの右腕が、肩の部分より、金属でできた、相手に向かって長く真っ直ぐ伸びる直方体となる。

それは元の腕の大きさよりも一回り大きいという程度の大きさで、その先には、ベルギアに向かう形で穴が開いており、その穴は腕の先から鳩尾の辺りまで続いている。

更に、それを支えるように添えた左腕からは、固定するように地面に杭が穿たれる。

ようするに、今のギリアの姿は、さながら多脚砲台のようであった。「な、何よそれえ！」

ギリアは戸惑うベルギアに向かって言う。

「『色欲』は快樂を精力とするんだよ。宝具は精力によって動く。他人のも自分のも、快樂によって一気にため込むから、『色欲』の宝具火力は凄まじいんだ。……なあ、オレは今すげえ気持ちいいんだ」

自分の中で、エネルギーが形になるのをイメージする。下腹部の辺りで形となったそれは、ギリアの体をゆっくりと上がってくる。精力が、エネルギーが鳩尾に集まる。そこからはもう、右腕から発

射するのみだ。心の中で、ゆつくりと引き金を絞る。全てはイメージだ。そこからは、爆発的に加速した精力が右腕から出て行く軌道を描くのみ。後は発射され、それは現実となる。

「ぶち抜け！！」

右腕の銃口から発射される薄水色の閃光を見て、ベルギアはとつさに念じる。それに合わせるように、『夜の蝶』と『淫獣』がベルギアを守るように立ちはだかる。まず、『淫獣』が閃光に激突した瞬間掻き消えた。閃光は衰えることなく突き進む。

「守りなさいよ！」

4匹の『夜の蝶』が、それぞれベルギアを守るように精力による壁を出現させる。1匹目と閃光が衝突し、ガラスの割れるような音と共に『夜の蝶』が1匹消える。それを受け、備えるように3匹が同時に衝突する。

「止まれ止まれ止まれ止まれ！！」

3匹に対して必死で精力を注ぎこみながらベルギアは叫ぶ。閃光は驚くべき速度で、宝具を間に挟めたのも奇跡のようだった。これがおそらくギリアの切り札であろう、とベルギアは考える。ここまでの速度と威力だ。これが取ってあったのなら、中盤からの余裕な態度も頷ける。しかし、とベルギアは思う。ここをしのぎ切れれば、こちらの勝ちなのだ。この閃光を打ち消せれば、『夜の蝶』で耐えることができる。勝てるのだ。避けることは考えなかった。この速度だ。普通に避けようとしても間に合わないだろう。それに今は、自分が満身の力を込めてようやく拮抗しているのだ。ここで変に避けようなどとすると、一瞬で負けてしまう。

「止まれええ！！」

「無駄だ！ 貫け！！」

再びガラスの割れるような音が、闘技場に響いた。と同時に、ベルギアは気が抜けた様な妙な感触を味わった。宝具が破れ、放出していた精力が行き場をなくしたのだ。

「あ」

危ない、と思った時には目の前だった。全身が焼けるように痛く。その衝撃にベルギアは吹っ飛んだ。

「っしゃあ！」

ギリアは全身を元の体に戻し、痛みを感じながらガッツポーズを取った。飛ばされたベルギアは、立ち上がる気配を見せない。それから10秒ほど静寂が続き、それでも動かないベルギアを見て、実況が声を上げた。

『勝者！ ギリア選手！！』

会場が湧く音を聞きながら、ギリアはベルギアへと近づいた。そのまま顔を覗いてみる。

「げ、生きてやがる。まじかよ、どんだけ粘り強んだよ」

それに合わせるように、大会運営側の人間が数人出てきて、ベルギアを運んでいく。どうやら治療がなされるらしい。

「この技、威力落ちたかあ？」

1人首を傾げていたギリアの横に、運営側の男が立つ。ギリアの担当をしている男だった。

「彼女も属性『色欲』です。ギリア様の打ち込んだものは、純度100%の精力の塊ですよ。つまり彼女は、それを無意識のうちにコントロールして、受けるダメージを減らしたのかもしれませんが」

「なるほどな」

頷いたギリアに、運営側の男は話しを続ける。

「それはそうと、一つ報告がございました。本来、1年を通して1人10試合程度行い、勝率の高いもの同士で決勝戦を行うこの大会ですが、今回、何者かによって負傷者が相次ぎ、もう選手がほとんど残っていないのです」

「つまり？」

はい、と前置きして男は言う。

「つまり次が地上と地下それぞれの決勝戦。その次が地上地下両優勝者の試合、という事です」

「は、随分と早く優勝者が決まるんだな」

「苦肉の策なのです。これ以上続けて被害者を出すのも憚られます」
「まあ、早い分には構わないけどな」

「ありがとうございます」

そう頭を下げ、男は下がって行った。

ギリアは天井を見上げる。照明が眩しく、少し目を細めてみると、キラキラと明かりが綺麗な模様を作った。ギリアは微笑み、開場を後にした。

「やっぱオレはこういう勝ち方が一番気持ちいいわ」

「パフォーマンスとしては良い勝ち方ね」

ヴァイオレットが遠ざかるギリアの背中を見送りながら言う。一度ピンチになって、それを盛り返す。そういう戦いは見る方としては好まれる場合が多いのだ。

「問題はあいつ自体がピンチになるのを楽しんでるところかしら。嫌な性格ね」

「素晴らしい性格ですよね」

ロベリアが微笑みながら頷いた。あんたも良い性格だよ、とヴァイオレットは心の中で呟く。

「やはり、ギリアさんは私の事を良くときめかせてくださいますね」

「阿呆の戦い方では？」

呟くベロニカに、ロベリアが言った。

「貴女も、感情が随分と出ているようですが」

「……申し訳ございません」

「いえ、そもそも貴女は感情の起伏が激しいのだから、わざわざ冷静なふりをしなくてもよろしいのですよ？」

「いえ、良いのです。騎士としてこれが正しい姿です」

「ほんっと、息が詰まりそうねあんたを見てると、そんなに背が高いからそういう生活を強いられるのね」

ヴァイオレットが身長を羨ましがるように、未練がましい目で見

ながら言う。

「でもま、あのムカつくデカ淫乱処女も、わたしが相手となればそういう余裕が持たなくなるんじゃないかしら」

あらあら、とロベリアは上品に笑う。

「随分と余裕があるんですね」

「まあね、止めるなら今のうちよ？ 死んじやつたらときめきも何もないじゃない」

「いいえ、大丈夫ですよ」

「うわ、その余裕っぽいムカつくわ。信じてるから、とか言っちゃうの？」

「いえ、そうでは無くて、まだ彼女は私の中では死んでしまっても大丈夫な人間というだけですの」

はあん、とヴァイオレットがその言葉に溜息をついた。

「なるほどね、じゃああなたにとって死んで大丈夫じゃない人間って誰？」

横目でちらりとベロニカを見ながら、ヴァイオレットはロベリアに尋ねる。

「……いえ、まだいないですね」

「はん、あんたも対外だわ」

ヴァイオレットは立ち上がり、ベロニカを見上げた。彼女は無表情のまま、ただ主の横で立っているだけだった。

「『色欲』の大罪人が勝った様でございますね」

突然の横からの声に、驚くことなくジアは答えた。

「まあ当然だろう。大罪人が、ただの『色欲』程度に負けるようではな」

そうでございますよね、とヒースはフィールドに残る閃光の残した痕を見ながら頷いた。

「しかし、凄まじい威力でございましたね。まさか単体であれとは、

『色欲』としての加護を最大限に活用すれば、いったいどれだけの威力になるのか」

「まあ見てみたい気もするが、それよりもあの性格が面倒だな、痛めつけると威力が上がるとか」

「ジアは静かに苦笑した。」

「まあ、それでも、俺に相対するにはまだ力が足りないさ。あんな砲撃、存在さえ知っていればどうとでもできるしな」

「それを聞いて安心いたしました。ならば後は『嫉妬』の大罪人が現れるのを待つのみ」

「ジアは力強く頷く。」

「そう、その時こそ俺の待ち望んだ始まりの時」

「『嫉妬』は生まれるのでしょうか」

大罪人の任命は、世界に認められた瞬間、世界によってなされる。ならば『嫉妬』の大罪人の誕生には、世界を認めさせるほどの嫉妬が必要なのだ。人間、そこまで人を妬むというのは難しい。

「まあ、嫉妬の対象が一人である必要はないしな。要は最後の引き金を引く者が居ればいいだけなのだ。大罪人『嫉妬』の候補、最早目星は付いているのだからな」

「しかし、あの少女が本当に大罪人『嫉妬』になれるのでしょうか」

「なるさ、『色欲』がその快楽から種族を1つほぼ壊滅させたというのなら、あの少女は嫉妬から国を1つ壊したのだ。素質としては十分だろう」

「ジアは足を組み、天井を眺める。『嫉妬』が現れ、7つの大罪全てがそろろう。その時こそが、俺の世界の誕生の瞬間なのだ。ジアはそう笑った。この場に居た全ての物を見下しながら。」

1勝6話 決勝戦開始

その日は、決勝戦が行われる日だった。最初に、地上側の決勝戦を行い、次に地下の決勝戦を行う。そして両者休憩の後、勝者同士の模擬試合が行われるのだ。

地上の闘技場のフィールドの上、ベロニカは相手に向かう。その様子を、ギリアはロベリアとヴァイオレットと共に観戦していた。「まったく、騎士様は決勝でも余裕そうなことで」

ギリアはフィールドに立つベロニカに視線を向けた。スピードもパワーも相手を圧倒している。一方的な試合展開で、観ている方としては退屈だ。

「逆にスカツとするわね」

ヴァイオレットが呟く言葉に、ギリアは頷いた。

「ほら、相手吹っ飛んでく」

「早かったわねー、決着つくの」

勝者を知らせる実況の声を聞きながら。ギリアは空を見上げた。地下の闘技場との一番の違いは空が見えるかどうかだろうとギリアは思う。フィールドの大きさは同じなのに、空が見えるだけで、こんなにも開放感がある。

「次の試合だけど」

横からのヴァイオレットの声に、ギリアは視線を向ける。身長ゆえに見下ろす形となることに苛立ちを感じながらもヴァイオレットは言う。

「地下の決勝、実はわたしとあなたの戦いになるんだけど」

「ああ!? てめえ出てたのかよ!?!」

「あんたも同じ反応か!」

自分と同じ反応をしたギリアをにこやかな笑みで見ているロベリ

アを横目に、ヴァイオレットは続ける。

「わたしはあんたの事が嫌いだけど、一応言っておくわ。死にたく
なかつたら棄権しときなさい」

真剣な表情のヴァイオレットに、ギリアはニイッと笑う。ギリア
はこの大会で、他人の試合など一切気にせずに来た。よって、彼女
がどれほどの強さなのか、どういった戦い方をするのか、そういつ
た事をギリアは知らないし、気にしない。だからギリアは笑う。

「オレは結構好きだわ、ヴァイオレットみたいな子供は」

「だから年上だって言ってるでしょ！」

「わかつてはいるんだがなあ、どうも年上な気がしないんだよ」

「私も、自分と同年だという事が少々信じられません」

ロベリアもギリアに同意するように言う。そんな二人に、やっぱり
りあんたらは嫌いだ、とヴァイオレットは苦笑した。

「後悔しても知らないからね、わたし敵には容赦しないわよ」

「オレも容赦しないって」

「今はこうして話してるけど、わたしは一度敵になった相手には、
憎まれ口しか吐かなくなるのよ」

それを聞き、ギリアは少し考え込むような仕草をする。今までの
彼女の言動を思い出し、言う。

「……………それって今と変わらねえよな」

「……………そうね」

微妙な空気になった二人の間で、やっぱり仲が良いのね、とロベ
リアは微笑んだ。

『今年、何故か闘技場の猛者たちが棄権し、ここから消えていくと
いうアクシデントがあった中、生き残り続けた二人の女がいた』

明かりで照らされた地下闘技場のフィールドに、実況の女性の声
が響く。

『それでは参りましょう！ アクシデントに屈しない並み居る強豪

を退け、ここに立つ美女が二人！ 紹介しましょうまずはこの人！
大罪人が一人、『色欲』のギリア・レプタンサ！！』

ギリアは、闘技場中の視線を感じながらフィールドに立つ。相対するは、愛らしい少女。

『そして、続いては彼女の登場だ！ その可愛らしい無垢な少女の姿に騙されるなよ！ 自称の二つ名は『カタカゴ』！ ヴァイオレット・ドッグトウース！！』

ヴァイオレットもまた、フィールドの上でギリアを見る。会場の熱気も高まり、後は開始の合図を残すのみとなった。その雰囲気十分に味わい倒した後、実況が叫ぶ。

『地下闘技場大会、決勝、開始ッ！！』

その声を受けながら、ギリアとヴァイオレットは同時に一歩、また一歩と踏み込む。じわりじわりと縮む二人の距離。ギリアはじつとヴァイオレットの顔を見つめる。

「あの変な砲撃はしてこないのかしら？」

「当然ねえだろ。それとも、当たってくれるのか？」

「まさか」

だよなあ、と苦笑し、ギリアは駆け、一気に距離を縮める。地面の振動すら伝わりそうなほどの強い踏込と共に、ギリアは加速した。その先にヴァイオレットが微笑んだまま立っている。

「ッ！？」

直感だった。嫌な気配を感じたギリアは、リンボーダンスを勢い良く潜るかのようになり、スピードを落とさずに屈み、進む。

するとその瞬間、屈む前のギリアの顔の位置に当たる空間が燃え上がる。

『空間が発火したア！ これがヴァイオレット選手の属性による能力か！？』

ギリアはスピードを落とさない。突然の発火くらいでは動じない。そんな様子に、ヴァイオレットは笑みを深くする。

「燃えなさいよー！！」

ヴァイオレットが手を横に薙ぎ払う様に振ると同時に、ギリアが飛び上がる。すると今度は、ギリアの居た地面が燃え上がる。

「上手く避けるのね！ ム力つくわ！ 本当に！ ほらもつと、読んでみなさいよわたしの『火炎』を！！」

ヴァイオレットの叫びと共に、ギリアは再び嫌な予感を感じ取る。それにしたがって、ギリアは無理やり体を捻り、空中に現れる炎をかわす。

「そう、そう、そうそう！」

『あれは属性『火炎』でしょうか！ 『火炎』の加護にそっくりです！』

「ネタばらしを始めるなんて、ム力つくことしてくれるじゃない」
ヴァイオレットの抗議の視線を無視して、実況の女性は解説を続ける。

『『火炎』の属性は非常に珍しいものとなっており、その最大の特徴は加護にあります！ 『火炎』は宝具を使うことなく、その加護を攻撃に使えるのです！ 『火炎』の加護は、その人の精力を使い、全てを燃やすと言われています！』

つまり、と実況の女性が切る。自分の右脚の辺りに違和感を感じたギリアは、大きく後ろに下がる。するとやはり、その位置が激しく燃え上がる。

『しかし、『火炎』のその加護は、視線で全てを燃やすといわれるほどに予想が出来ないものです！ いったいどうやってギリア選手は避けているのか！？』

その言葉に、ヴァイオレットが続いた。

「…………『色欲』の加護ね？」

『…………なるほど！ 確かにヴァイオレット選手の言う通りでしょう！ 先の試合でわかった通り、『色欲』の加護の効果は他人の精力を操り、自分の物とすることです！ ならばギリア選手は感覚で、ヴァイオレット選手の燃やそうとしている場所がわかるのではないのでしょうか！ 『火炎』の加護は位置固定！ 動く物体を宝具無し

に追うことはできません!』

「なるほどね」

自分が先ほどから何を頼りに避けているのか、ようやく得心が言ったという様にギリアは頷く。その様子に、ヴァイオレットは苛立ったように言う。

「気が付いてなかったの!? 自分の能力を把握していないなんて、ム力つく女ね……」

「だが、確か『火炎』って属性は幼少期に炎関係の何かトラウマになるような出来事が無きゃ付かないんじゃないか?」

ギリアの疑問の声に、そうです、と実況の女性が同意する。

『『火炎』や『疾風』といったものは、その幼少期のトラウマによって付くのです。しかし彼女の体にはパツと見……ハツ!? まさか言えないようなあの場所に!? そりゃトラウマだ!』

「誰かあの女黙らせる!!! …… ったく」

ギリアは溜息をつき、ヴァイオレットを見る。ヴァイオレットはギリアの視線を受け、駆け出した。そのまま飛び上がり、ギリアを見下ろしながら左腕の拳を握る。

「剛腕! 『黄金の左』!!!」

振り下ろされる左拳を、ギリアはギリギリで避ける。空気を切るような音と共に振り下ろされた左拳は、地面と衝突すると、地面を大きく抉った。

「こんの、馬鹿力が!」

渾身の力で、ギリアは金属によって強化した脚で回し蹴りを放つ。ヴァイオレットは、先ほどの自分の攻撃によってできたクレーター中央でその回し蹴りを防御する。

「ッつあ!!!」

受け止めたことによって生じる痛みを耐えながら、ヴァイオレットは左の拳を硬く握る。

「なんつて硬さだ!!!」

ギリアは叫び、腕を交差させ攻撃に備える。と同時にヴァイオレ

ツトの拳が交差させたギリアの腕に衝突した。

「だりやア！！ 飛んでいきなさいよ！」

金属で強化した腕が砕け、血が流れ出す。ギリアがヴァイオレットを睨む。ヴァイオレットの左拳も血だらけとなっていた。

「そつちこそ！ 馬鹿みたいに硬いのよ！！」

ヴァイオレットもギリアを睨み、叫んだ。ギリアは、砕けた両腕に籠手の様に金属を纏わせながら駆け出す。そのまま右腕を振り上げ、殴りかかる。それに応じるように、ヴァイオレットも、左拳で殴りかかった。

とても人間の出す音ではない音と共に、ギリアの右拳とヴァイオレットの左拳が衝突する。一瞬の膠着（カウチング）の後、ギリアはヴァイオレットの精力の匂いを感じ取った。

「畜生！」

「逃がさないわ！」

ギリアの右拳をヴァイオレットは掴み叫んだ。と同時に強まる気配に、ギリアは急ぎヴァイオレットの手を振り払い、屈み、そのまま足払いをする。

「なっ！？」

足を払われ、不安定なヴァイオレットに、屈んだギリアはその右腕を凶器へと変える。自分の上空で燃える炎を背に、ギリアはヴァイオレットに一撃を入れるために自らが淫凸と呼ぶ凶器を手的一步踏み込んだ。そして、力強い一撃を入れるための踏ん張りのために、強く足を下ろそうとした位置に、球形の、大きな石が転がり込む。

「あア！？」

それを勢い良く踏んでしまい大きくバランスを崩したギリアの転ぶ先に、先ほどのヴァイオレットの一撃によって隆起した地面が現れた。鋭く尖るそれは、絶妙な角度で存在しており、このまま倒れていけば高確率でギリアの体にその塊は突き刺さる。

「ラッキーね！」

ヴァイオレットがそんな様子を見て叫ぶ。ギリアは慌てず、その

塊を叩き潰して対処する。

『おおっと！ どうしたとこのかギリヤ選手！ 絶好のチャンス
を転んで逃してしまつたーッッ！』

「そしてチャンスよ！！」

拳を握り、ヴァイオレットは一気に空中で地面から隆起した鋭利な塊の対処をしているギリヤの元に飛び込み、殴る。

「ガハッ！！」

「背中に直撃ねー！！」

そのまま吹き飛ばされるギリヤを見ながら、ヴァイオレットは追撃の準備をする。一方のギリヤも急ぎ反撃に入る。飛び込んでくるヴァイオレットに、カウンターを食らわせようとしたギリヤの左腕は、しかしたまたま先ほどの攻防で空中に舞い上がっていた拳大の石にタイミングをずらされる。

「まあたまたラッキー！！ くらいなさいよ！！」

ずれた左腕のパンチを掻い潜り、ギリヤの懐まで潜り込んだヴァイオレットは、ギリヤに思い切りアッパーを決めた。

『入ったー！！ これはまるで、ヴァイオレット選手を幸運の女神様が勝たせようとしているかのような幸運だ！！』

「いいのよ、幸運も実力のうちなんですから」

べえ、と舌を出したヴァイオレットは、吹っ飛ぶギリヤを見送る。吹っ飛ぶ先はたまたま、また別の鋭利な岩が生えている部分だ。

「っただア！！」

渾身の力で、無理やり岩を破壊し、受け身を取つたギリヤは立ち上がり構える。

『ヴァイオレット選手！ そのような小さな体のいったいどこにそんな力があつたのかという程に、凄まじいパワーです！ このような身体強化は本来『暴食』の属性の特権ですが！ どういうトリックなのでしょつか！』

「どうもこうも、さっき自分で言っていたのにね」

おかしな話し、とヴァイオレットは笑い、名乗りを上げる。

「わたしだけあなたの属性を知ってるって状況でわたしが勝って、後で言い訳されても困るから、教えてあげるわ！ わたしは『過多^{かた}加護^{かこ}』のヴァイオレット！ 属性は『嫉妬^{かた}』！」

「過多……加護」

「そう！ 本来人が持てる属性の数は一つと決まっているのよ！ それ以上は過多！ でもわたしは今3つの属性の加護を持っているの」

指を三本立てて、ヴァイオレットは続ける。

「まず一つ、属性『火炎』！ これはもう味わったでしょう？ そして二つ目、属性『暴食』の身体操作！ これも実況の言った通りね」

そして三つ目、とヴァイオレットは叫ぶ。

「属性『幸運』！ どうかしら！ 幸運の女神様しか持ちえなかった属性よ！ さすがに女神様ほどの力はないけど、それでも凄まじい属性よ！ わたしの連続不戦勝も！ 対戦相手の自滅も！ 全てこの加護によるもの！」

ぐん、と大きく両腕を広げたヴァイオレットは、小さな体をめいっぱいに大きく見せながら続ける。

「どうかしら？ 素晴らしいでしょう！ さあ、素直にわたしに嫉妬しなさいよ！」

ギリアはその言葉に、小さく舌打ちをする。

「幸運ね、めんどくさそうなのが来たなオイ」

そう言い、二人は同時にクスリと微笑んだ。

1章7話 青空の下

イワニガーナ王国と、オノエテラと呼ばれる大国の間に、ひっそりと隠れるようにモンクスフッドと呼ばれる小国が存在した。幸運の女神が現れた地として有名な国だ。

ヴァイオレット・ドッグトウースは、その小国で生まれ育った。人を羨ましがりやすい子供だった。例えば他の子供が何か新しいおもちゃを持っていると、それが羨ましくてしょうがなく、夜も眠れなくなるような、そういう子供だった。

ヴァイオレットはモンクスフッドの首都の外れの森の中、ボロ小屋の中で暮らしていた。両親はいなかった。顔も知らない。生きているのかどうなのかも、ヴァイオレットにはわからなかった。残飯を漁り、街を行く人々を眺めるだけの毎日。幸せそうな人間を見るたびに爪をかみしめた。いつか貴様らを見返してやる、と嫉妬し続けるだけ。

そんなヴァイオレットに手を差し伸べる人間がいた。散歩中だったモンクスフッドのお姫様、ヒルガという空の様に美しい髪を持った少女だった。彼女は美しさと同時に優しさを兼ね備えていた少女で、街角で蹲るヴァイオレットをほっておく事が出来なかったのだ。「どうしたのですか？ お腹が痛いのですか？」

「……………」
当時ヒルガは7歳、ヴァイオレットもおそらく同年代だった。ヒルガは、蹲り虚ろな目で通りを眺めているヴァイオレットの手を握りしめると、力いっぱい引っ張って助け起こした。

「大丈夫ですか!？」

急に立たされたことによる立ちくらみと日頃の栄養不足で、ヴァイオレットはヒルガに答えることなく意識を失い、後にはどうすれ

ばいいのかとオロオロするヒルガだけが残された。

それから数日、目が覚めたヴァイオレットは、今までに無い寝心地のベッドに戸惑っていた。見れば、服もみすぼらしい物から綺麗な物へと変わっている。目が覚めたヴァイオレットを見て、そばに控えていたメイドの一人そつと室外へと出て行った。数分後、医者を呼んできたのだと判明した。

それからしばらくは回復に努めた。そしてさらに数日後、ヒルガがヴァイオレットの寝ている部屋に訪れた。

「まあ！ 良かったすつかり元気になつて！」

体全体で喜びを表現するヒルガに、ヴァイオレットは戸惑った。とりあえず、どうやらこの少女が自分の回復を喜んでいるのだと理解したヴァイオレットだったが、何故そこまで喜ぶのかも理解できず、さらに戸惑った。

そんな様子も気にすることも無く、ヒルガはヴァイオレットの手を両手で握りしめ微笑む。

「はじめまして、わたくしはヒルガといたしますの。あなたは？」

「……ヴァイオレット」

「まあ、じゃあヴィオね！ よろしくね、ヴィオ！」

その言葉の意味が理解できなかったヴァイオレットは首を傾げる。その様子を見かねたかのように、外から若い男性が一人入ってくる。ヒルガと同様に空色の髪的青年だった。

「君の家を探したのだが、我々にはどうにも見つけれなくてね。それでどうしたものかと考えていたのだが、どうだろう、御両親が見つかるまで、この娘の遊び相手としてしばらくうちに居てくれないだろうか」

ヒルガの頭を撫でながら青年は言う。実は青年の部下はヴァイオレットのボロ小屋を見つけていたのだが、このままボロ屋敷に少女を帰すわけにはいかないという苦肉の策だった。その言葉にヒルガが賛成するように頷く。

「嬉しいわ！ わたくしずっとお友達がほしかったの！」

「そういう事だからどうだろうか。我々を助けると思っ、ここで暮らしてはくれないだろうか」

ヴァイオレットが頷くと、ヒルガは舞う様に喜んだ。それを見て青年は優しく微笑んだ。そうしてヴァイオレットに、生まれて初めての友人が出来た。

それから1年、何事も無かったかのような、幸せで楽しい日々が続いた。ヴァイオレットはヒルガの友人として、共に学び、良く助け、遊んだ。二人が喧嘩をするところなどは誰も見たことが無く、偶にヒルガが拗ねたように頬を膨らませる程度の事はあったが、ヴァイオレットも良く笑う様になったと皆が言うようになった。

ある日、二人が鬼ごっこをして遊んでいる時の事だった。ヴァイオレットはヒルガから逃げる最中、大きな女性の絵が描かれた部屋へと訪れた。そこはいつもは嚴重に警備されている部屋で、ヴァイオレットは入ったことが無い部屋だった。取りつかれたように絵を見つめるヴァイオレットに、近づいてきたヒルガが抱き着く。

「ヴァイオつかまえました！」

「うわわっ！？ いきなり何すんのよ！ まったく」

「何って、鬼ごっこじゃないですか」

まあそうだけど、と呟いたヒルガに、ヴァイオレットは絵を指さして尋ねる。

「これって誰？」

絵を見たヒルガは、その絵に描かれた女性を見つめ、答える。

「幸運の女神様ですわ」

「女神様？」

「そうですね、この小国モンクスフッドを今も守ってくださいている女神様、らしいのです。彼女がたくし達モンクスフッドの王家を選んだらしいのです。最初の王様は、とても王様らしくない、庶民的な方だったらしいのですが、とても優しく、また女神様の加護

によって守られていたので、この国はここまで大きくなったらしいのです」

そう言い、ヒルガは己の手のひらを見つめ、そこに流れている自分の血の事を考えた。

「それ以来、王家の人間には幸運の加護が付く様になったのです。と言っても女神様のモノと比べたらそれは微々たるもので、ちよつと良い事あるかも、程度らしいのですけどね」

「ふうん、ヒルガもその幸運が？」

そうヴァイオレットが聞くと、ヒルガは誇らしそうに頷いた。

「ええ！ そうなのです。わたくしにもあるのですが、お兄様の力は一族でも群を抜いているほどのモノらしいのですよ！」

興奮気味に言う。自分の大好きな兄の事を話すのが嬉しいのだから。そんなヒルガを、爽やかそうな彼女の兄の顔を思い出しながらヴァイオレットは眺めた。

「そうなんだ、やっぱりあんたたちって特別なね、羨ましいわ」
そう呟いたヴァイオレットの声は、ヒルガには届いてはいなかった。

「どうしたんです？ ヴィオ」

「ふうん、何でもないの。ヒルガが羨ましいなって思っただけ。だってあなたってとっても綺麗だし、家族の人はみんな優しいし」

そう言われ、ヒルガは照れた様に笑う。

「そんなことないですよ。いや、お父様とお母様とお兄様は確かに優しいのですが。それにヴィオもとっても綺麗ですよ。わたくしはあなたが好きですわ」

その言葉に、ヴァイオレットも心底嬉しそうに、照れた様に微笑み返す。

「ほんと？ 嬉しい、わたしもあなたの事が大好きよ」

翌日、ヴァイオレットは一人ヒルガの兄の元を訪れていた。彼は突然の小さな来客に少し驚いたような顔をしたが、すぐに嬉しそう

に自分の部屋に招き入れ、お茶の用意をした。

「今日はどうしたんだい？ 珍しいね、ヴィオ君が一人で私に会いに来るなんて」

ヒルガの兄は、ソファーにヴァイオレットを座らせ、自分は対面に腰かけながら言う。昼間なので、未だ使われていない照明が、天井からぶら下がり二人の頭上で揺れている。

「まあ君も、随分ここに慣れてくれたみたいで安心したよ」

「あの」

ヴァイオレットが、恥ずかしそうにヒルガの兄に言う。

「すみません、ヴィオと呼ぶのは、できればやめてほしいのですが」「くくつ、いやそうかい、二人だけの呼び名という事かい」

そういう青年の言葉に、顔を赤くしてヴァイオレットは俯いた。そしてそのまま、子ども扱いしてほしくないのと呟く。そんな様子にまた可笑しそうに青年は笑う。

「それで、今日は何か用があつたのかい？」

「はい、あの、今日はお願いがあつてきたのです」

「お願い？」

はい、と頷いたヴァイオレットは、一拍置いて話を続ける。

「わたしを、あなたの妹にしてほしいのです」

「は？ ……いや、くくつ」

ひとしきり一人で笑った後、ヒルガの兄は一人納得したような表情で頷いた。

「なるほど、それはヒルガと家族になりたいという認識で良いのかい？」

そうヒルガの兄が言うと、ヴァイオレットは真っ赤な顔で小さく首を横に振る。おや違つのかいと首を傾げる青年に、ヴァイオレットが言う。

「そうじゃなくて、あなたに、ヒルガと同じような扱いをしてほしいのです」

呟かれた言葉に、青年は目を丸くした。ヴァイオレットは未だに

顔を赤くして俯いている。青年はその言葉に、嬉しそうに頷いた。
「君が初めてここにきて、もう1年は経っただろうか。我々の力が及ばず、君の家族を見つucker事が出来なかった。そんな私だが、もし君が許すのならば、兄として、家族として、君を支えていきたいと思うよ」

その言葉に、ヴァイオレットは嬉しそうに顔を上げた。

「本当ですか！？ いえ、本当に、わたしなんかが家族になって、もしあなたが不幸にでもなったら」

そんなヴァイオレットを安心させるように、目線を合わせて青年は言う。

「そんなことはない、それで君が幸せになってくれたらこんなに嬉しい事はないよ。君の幸せが、私の幸せだ」

はつと息をのみ、ヴァイオレットは俯いて体を震わせた。そんなヴァイオレットに、青年は安心しなさいと優しく囁きかける。

「わたしは、あなたみたいな優しいお兄様を持つヒルガが羨ましかったのです」

「そうか、ありがとう。そこまで私を評価してしてくれたとは、嬉しいよ。どうかこれからも、ヒルガと仲良くしてやってくれ」

「はい、わたしもヒルガが大好きですから」

よかった、と言い青年は立ち上がり、部屋の外に控えていた自分の従者呼び出した。入ってきた男は、二人に恭しく頭を下げる。その黒い手袋を着けた男に、青年は言う。

「父上たちに話してきてくれないか？ 今日私たちに新しい家族が増えるから、パーティをしよう、と」

「はい、了解しました」

再び恭しく頭を下げ、男は部屋から出て行った。

ヴァイオレットは、男に見覚えがあった。ヒルガの兄の従者らしいその男は、小さい頃に大火傷をしたらしく、今もその火傷を隠すように常に手袋を着けているらしかった。ヴァイオレットは、何度かその男に助けられた事があった。ヒルガとのかくれんぼで、自分

の居場所がわからなくなった時に、ヒルガの元まで案内してもらったこともあった。

この王宮の人間は全員優しい、とヴァイオレットは思う。こんな自分にも優しくしてくれる。ヴァイオレットは素直にそのことに感謝していた。

しかしそれ以上に、ああそれ以上にヴァイオレットはヒルガが羨ましかったのだ。誤解を招かないように記しておくが、ヴァイオレットはヒルガが嫌いなのではない。自分よりも、地位も名誉も持つていて、美しく、優しい。羨ましくて羨ましくてしょうがないが、この嫉妬こそが、ヴァイオレットがヒルガのことが大好きだということの何よりの証明だった。

つまり、これはヴァイオレットなりの、最大級のヒルガへの愛情表現だったのだ。

ヴァイオレットは立ち上がり、こちらに背を向けるヒルガの兄の背を刃物で突き刺した。

刃物は、幸運にも外れず、深々と突き刺さった。これが幸運の女神だったならば、双方に何事も無く、綺麗に物事が解決するほどの幸運を見せたことだろう。しかし青年は幸運の加護を受けているとはいえ、人間だった。

青年を刺し殺すことが、ヴァイオレットにとって何よりも幸運だった。ヴァイオレットの幸運は青年の幸運だ。中途半端に受け止めてしまつて、ヴァイオレットが捕まることになつてしまふのは、青年にとつても避けたい事、不幸だった。そして、中途半端に刺さつて苦しみを味わうくらいならば、一瞬で死ぬことも、また幸運だった。

そうして、ヒルガの兄は、ヴァイオレットの一刺しによって絶命した。さらにヴァイオレットは自分の中に、力が入り込むのを感じた。ヒルガの兄の『幸運』が自分の中に入り込んできたのだと、直観的に理解した。自分が『嫉妬』したヒルガの家の『幸運』が、勝ち取ることによつて自分の物にあつたのだと。これこそが『嫉妬』

の加護なのだ。

ヴァイオレットは笑う。わたしの幸福は、ヒルガの全てを潰すことなのだ、と。それこそが自分なりの、最大級の愛のしるしなのだ。そうして、ヴァイオレットは、最早物となった青年の背中を踏み越えた。

王宮は、パーティの用意で忙しかった。誰もが彼女の言葉を喜び、自ら進んで準備を行った。王様も御后様もその報告を自分の事のように喜んだ、そしてヒルガも、大喜びして、自分のおこづかいを握りしめ、プレゼントを買うために街へと走った。

そしてヒルガの兄の従者の、黒手袋の男は、自分の主人の死体を発見していた。

「なっ!?!? どういうことですか!?!?」

駆けより、叫ぶ男に、ヴァイオレットは部屋の入り口を塞ぐ形で向き合った。

「……… いったい、どういうことでしょうか、ヴァイオレット様。いや、どうということだ、小娘」

その言葉に、ヴァイオレットは悲しそうな顔で、そして嬉しそうな声で答える。

「それがわたしなりの愛情表現だったのよ、そんなに怖い顔しないでよ。まったく、だから言ったのよ、わたしなんかを家族にしても良い事無いのよって。本当に良い男よね、馬鹿な男」

その外見に似合わぬ、妙に大人びた声に男は構える。男の属性は『火炎』だった。今ここで集中すればこの少女を焼き殺せる、と男は考える。

「何故こんな事をしたア! 彼は、あんたの事を、本当に自分の妹の様に可愛がっていたのに!」

「だからこそよ!?!」

「悪魔め!」

叫び、丁度ヴァイオレットの位置を燃やそうと集中する。そんな

男の後頭部に、鈍い衝撃が入る。

「があっ！！」

突然の強い衝撃に、男の集中は途切れ、頭を抱える。不幸にも、そしてヴァイオレットにとっては幸運にも、部屋の照明が男の頭に落下したのだ。そのままヴァイオレットは刃物を振り上げる。

男の胴体に向かって振られた刃物は、幸運にも、素人とは思えないほどのさばきと共に急所に命中する。簡単なものだ、とヴァイオレットは思った。そして実感する。

「今度は『火炎』ね、本当に、自分の才能に嫉妬しちゃうわ、なんてね」

部屋の死体が二つとなる。ヴァイオレットは笑みを浮かべたまま、部屋から出て行った。

「これなら喜んでくれますかしら」

ヒルガがヴァイオレットのプレゼントに選んだのは、花のアクセントが可愛い、銀のネックレスだった。それを大事に抱きしめて、ヒルガは自分の家を目指す。

王宮の中に入ると、そこは妙に焦げ臭かった。しかしヒルガは、メイドの誰かが料理を焦がしてしまったのかしら、と笑い、パーティの部屋を目指す。着替えるべきかとも思ったが、まず真っ先にヴァイオレットにプレゼントを渡したかった。

「ヴィオはちゃんと居るかしら」

そう微笑み、扉を開けたヒルガの視線の先、その光景は、中途半端に焼け爛れた自分の両親と、完全に丸焦げになった使用人たち、そしてその中央で微笑む自分の親友だった。

「え？」

その眩きに、ヒルガの存在に気が付いたヴァイオレットは、満面の笑みでヒルガの腕を引っ張り、パーティ会場へ招き入れる。

「ああ、来てくれたのねヒルガ！ それは何？ わたしへのプレゼントなの！？ 嬉しい！ わたしもあんたの為に頑張ったのよ！」

そう言い、ヴァイオレットはプレゼントを引っこたくり、眺める。
「うわあ！ すっごく綺麗！ わたしとっても嬉しいわ！」

そのネックレスを首に当て、喜ぶヴァイオレットを見て、それが目的のリアクションであるにも関わらず喜べていない事をおかしく感じたヒルガは、しかし思考を停止させる。

「ねえヒルガ、わたしあんたが好きよ。とっても優しくて、何でも持つてるあんたが大好き。もう愛してるわ！ だからあなたにはわたしと同じところに落ちて来てほしかったの」

でもね、とヒルガの頭を抱きしめながらヴァイオレットは続ける。
「でも気が付いたの。わたしはあなたに嫉妬していたあの関係が一番気持ちよかつたんだって。ここまで来るのはまるで高いところから飛び降りるような、すばらしい快樂だったけど、でもあなたがわたしのところまで落ちて来てしまったらそれは違う気がするの。だからね、わたしの憧れであるうちに、永遠にわたしの嫉妬の対象として、憧れとして、初恋として、死んでほしいの」

どうかしら、と首を傾げるヴァイオレットを見て、ようやくヒルガは理解した。この状況を作り出したのがヴァイオレットだということに、理解し、涙を流しながらもヒルガもまた微笑んだ。

「うん、わかつたの、ごめんなさい、辛い思いをさしてしまいました。わたくしも大好きですわ。嬉しかったの、あなたと家族になれると聞いて」

そうして、そつとヴァイオレットは本能のままにヒルガの唇に吸い付き、優しいながらも野性的なキスをして、彼女の首を身体強化によって綺麗に刈り取った。

国王が亡くなつてからの、モンクスフッドの衰退は早かった。他の小国や、周りの大国に吸収され、国民もいなくなり、どんどん領土を失い、遂には王宮のみとなった。王宮にも各国の兵が押し寄せたが、一人の少女により全滅。王宮のみが不落の存在として、唯一

のモンクスフッドの領土として残り続けた。

ヴァイオレットは、腐らない様に防腐の加護をかけたヒルガの首を膝に乗せ、玉座に腰かけながら、穴の開いた天井から青空を眺めていた。

「ヒルガと同じ色、今日も良く見えるわね」

ヴァイオレットの首には、ヒルガからのプレゼントの首飾りがある。ヴァイオレットが指でそれを弄っていると、二人の来客が訪れた。

精悍ながらも上品さの漂う顔立ちをした金色の髪を持つ男性と、端正で中性的な顔立ちの漆黒の髪を持つ男性だった。金髪の方の、ジアと名乗った男が隣のヒースと名乗った男に尋ねる。

「この小娘が、大罪人『嫉妬』の最有力候補なんだよな？」

「というよりも、この方以外相応しい方がいないという状況でしょう。あと一息だと思うのですが」

「ほう。ならば小娘。存分に俺に嫉妬しろよ」
そんな男二人を、ヴァイオレットは煩わしそうに見る。

「なんなのよあんたら、今わたしは最上級の幸せを噛みしめてるのよ。あんたなんか嫉妬するわけじゃないじゃない」

その言葉にジアは大声を上げて笑う。

「なるほど！ 大した傲慢だ！」

「わたしに嫉妬したの？」

「いやしかし、それでは困るのだ。俺の願いの為に、お前には新しく誰かに恋い焦がれるかのように嫉妬してもらわねばならないのだ」

「でもわたしがこれ以上燃え上がるとは思えないのだけれど。そんな人本当に居るのかしら」

「知らんが、いて貰わねば困る」

「でもわたし今『幸運』だから。よっぽどのが無い限り、本心から相手に嫉妬なんてしないわよ」

「ならばまずは外に目を向けてはどうか！」

ジアは両腕を外に振る。

「そろそろ初恋から克服し、次の幸せを探しに行くというのも良いのではないだろうか！ 彼女も5年もつき合わされれば、いい加減に家族と眠りにつきたいのではないか!？」

「そうなのかな」

ヴァイオレットはヒルガの顔を覗き込む。ヒルガの何も言わない顔を見て、しかしヴァイオレットは頷き。

「そうなのかもしれないわ。だって初恋は永遠だから。わたしが忘れなければ、あなたはわたしの中で永遠にわたしの嫉妬の対象。届かない向こう岸の存在にいるのだから」

「それにだ、お前がもう一度その少女に心の底から嫉妬したいというのなら、方法が無いわけではないのだ」

「何よそれ、生き返るとでもいうの?」

「まあ、可能だろう。しかし探せば生まれ変わりがいるのではないか?」

「どうやって見つけるのよ」

「まあそうだが」

そう言い、一息置いたジアは話を続ける。

「さて、まずお前がすることは単純明快だ。彼女以外で、新しく嫉妬の対象を見つけて出す。心の底から嫉妬できる。新しい相手を見つけて出すのだ。初恋は叶わないというが、まあ2回目ならば、いい結果を生むのではないか?」

笑い、ジアはヴァイオレットを見る。そして、どうだろう、と首を傾げた。ヴァイオレットは、ヒルガを持ち上げると、中庭にある他の人たちのお墓の元へと運んだ。ヴァイオレットによって作られた無数のお墓の先頭に、三つ並んだ大き目のお墓があった。王様と御后様、そして王子様の分だ。お姫様であるヒルガの首を汚れないようにそこに置くと、向かい合う様にしゃがみこんだ。

「わたしこれからもう一人、あなたと同じ対象を探すために旅に出ることにするわ。そうしたらあなたとまた会えるんですって。あなたは浮気だって笑うかしら、実質二股になるんだしね」

一度ヒルガの頭を撫で、ヴァイオレットが立ち上がる。「幸運」を打ち破る人間は現れるだろうか、わたしが打ち破れたのは、それが相手の幸運だったからだ。まだ見ぬ相手は、どう打ち破るのだろうか。打ち破られた時、わたしの元から「幸運」も「火炎」も「暴食」も消えてなくなってしまう。きつとその、打ち破った相手をわたしは嫉妬することになるのだろう、と淡い期待を胸にヴァイオレットは空を見上げた。

それから6年。本心から、一度も誰にも嫉妬することなく、ヴァイオレットは地下闘技場のフィールドに立っていた。胸元にネックレスをさげ、笑う。相対するは「色欲」の大罪人。彼女は、肩で息をしながら笑っている。

「じゃあ行くぜ！ オイ、オレが勝っても泣くんじゃねえぞ！」

そのまま両足を金属に変えていくのがヴァイオレットからでも見える。どうやらベルギア戦での多脚砲台を再びやるらしいというのが読み取れたヴァイオレットは、余裕の表情を見せる。

あの砲撃は確かに強力だったけど、動き回ってさえいればあの砲台は追いつけない！

ヴァイオレットはそう考え、もしもの時の為に腕を身体強化で鍛えておく。ヴァイオレットの奪った「暴食」で強化できるのは腕だけだったのだ。強化された腕をぶら下げ、ギリアに集中する。

燃えろッ！！

向こう側も発動を感じ取ったかのような反応を見せたが、多脚砲台としての準備を行っている最中だからだろうか、全身を鎧のようなもので守るだけだった。あれならば殴って突破できるかもしれない。そう考えた時、ギリアが右腕を高く頭上に掲げた。唯一肌が見えている顔の表情は満面の笑みだ。掲げた右腕、砲口の役割を果たすその大きさが、前回の時とは段違いに大きかったのだ。

「大きくしすぎると、濃さが無くなるからな、ここがベストだろうがよー！」

そう叫ぶギリアは、舌を出して笑う。そのまま地下闘技場の天井、二人の頭上を閃光がぶち抜いた。地上まで抜けた大穴を、地下闘技場の天井で、地上の闘技場のフィールドだった大量の塊が舞う。一つ一つが人を押しつぶせそうなほどの大きさの、岩の様な塊が、今にも二人の立っている位置目がけて雨の様に落ちてきそうだ。そんな瓦礫の向こう。青空を見ながらギリアは笑う。

「中途半端に運になんか頼ってんじゃねえよ！ オレ達は神様じゃねえんだから！！ 存分に這い上がる楽しみつてのを教えてやんよ！！」

その砲口を、ヴァイオレットに向けギリアは叫ぶ。自らの一族を滅ぼし、ただ強くなる日々酔いしれる幸福を思い出しながら。

ヴァイオレットは考える。あの量の瓦礫の雨が来ても、おそらく『幸運』によって避けきる事が出来るだろう。さらにおそらく向こうは避けきれない。しかしギリアは自信満々に笑っている。

ゆっくりと、瓦礫の雨が降ってくる。

まずは二人とは全く関係のないところだった。二人は同時に笑う。ヴァイオレットはいつか思った。どう『幸運』を突破するのだろうか。しかしそれが。

「力技だなんて！」

ギリアは幸運なんて関係なしに砲撃でこちらをぶっ飛ばすつもりだ、と気が付いて、なおヴァイオレットは笑う。

確かに！ あくまでこれは人間の『幸運』！ 避けられないものは存在する！ けれど！

「それがあなたと決まったわけじゃない！！」

叫ぶと同時に、ヴァイオレットを守るように二人の間にいくつもの巨大な瓦礫が立ちはだかる。

「そんなもの！ オレに取っっちゃ紙よりも薄っぺらいわ！！」

叫び、ギリアが狙いをヴァイオレットに定め、エネルギーを再び貯めはじめると同時にヴァイオレットは駆けだした。

大量の瓦礫が降ってくるが、ヴァイオレットには一切当たらない。

対するギリアは、防御はしているものの。手ごろな大きさのものが何度もぶつかっている。

「あー！！！ ウザったい！ 誰だよこんなの降らせたの！！！」

「あんだだろ！！ ったく！」

足の裏で地面を捻り、勢いよくギリアの懐に飛び込む。砲撃を行う右腕の内側にさえ入ってしまえば、ギリアの砲撃はヴァイオレットには当たらない。

「どうよ」

にやりと笑い、拳を構えるヴァイオレットに、ギリアも笑みを返す。

「これでどうだい！！」

そういい、ギリアは右腕を短くなるように切り落とす。これにより、再びヴァイオレットに向けることが可能になった砲口を、すかさず向ける。エネルギーによる発光がヴァイオレットから見えた。

短くなった右腕を、片手で砲撃の為にヴァイオレットに向けるギリアに対し、再び地面を足で捻り、砲口に向き合うことでヴァイオレットは対応した。

砲撃を阻止させるわ！！

ヴァイオレットの判断は一瞬だった。

両者の距離は1メートルも無いだろう。上から閃光によって撃ち飛ばそうとするギリアと、下から殴り飛ばそうとするヴァイオレット、周囲には瓦礫の雨が降るが、ヴァイオレットの幸運か、両者の元には瓦礫は振ってこない。

「吹っ飛ばす！！」

「わたしは、運が、良いのよ！！」

砲口に、ヴァイオレットは強化した拳をぶち込んだ。出口を塞がれる形となった砲撃のエネルギーは、行き場を失い暴走する。そうしてそのまま、二人の間で爆発が起きた。ヴァイオレットは確信していた。この爆発によるダメージが痛み分けたとしても、『幸運』によって守られるヴァイオレットを勝たせるために、ギリアの吹っ

飛ぶ先には何かあるのだろうか。そしてヴァイオレットは見る。先ほどの爆発によって吹き飛ばされた空中で、瓦礫の雨の間から、左腕を砲撃用に変え、その砲口で自らを狙うギリアの姿を。

「まだ来るの!?!」

「当然!」

と同時に、エネルギーが閃光として放たれる。幸運にも、ヴァイオレットとギリアの間には再び瓦礫が舞い落ちるが、それだけではこの閃光は止まらない。幸運にも、ギリアに向かって特大の瓦礫が落ちていくが、ギリアは笑ってそれすらも砕く。閃光を燃やそうとしてみるが意味も無く、ただ強化した左腕で守るのみ。そのままヴァイオレットはギリアの砲撃に吹き飛ばされた。

「ガハッ!」

決定打だった。それほどのエネルギーを持つ砲撃だ。2発目の砲撃の時に、右腕は根元から綺麗に吹き飛んだ。焼けきれていて、血も出てこない。自分が今生きているのは、くらったのが3発目だったからだろうか、とヴァイオレットは仰向けに倒れながら考えた。ギリアによって開けられた大穴からは光が差し込んでいる。

「ああ、青空が見えるわ」

全身ボロボロのまま呟いた。おそらく今はもう立てないだろう。瓦礫の山の上で、ギリアが立ち上がるのがヴァイオレットの位置から見えた。青空を背にして、ギリアがこちらを見下ろしている。ギリアが立ち上がる際、いくつかの瓦礫が転がり、ヴァイオレットに当たる。それによって、ようやく自分は負けたのだと理解した。

よりによってこの淫乱処女が、わたしを打ち負かす相手なんて、まったく嫉妬してくるわね。

そのまま覗き込むようにギリアがヴァイオレットを見る。バックでは実況の勝者を告げる声も聞こえてくるが、そちらはヴァイオレットの耳には入ってこない。狂おしいほどの感情が一気にヴァイオレットに押し寄せる。

ヒルガと全然タイプが違うじゃないのよ。

ヴァイオレットはそう笑い、仰向けのままギリアを見上げる。ギリアは瓦礫の山の上からヴァイオレットを見下ろしたまま言う。「どうだ！　こんなにも気持ち良い勝ち方をしてやったぜ！！」

その言葉に、ヴァイオレットは素直に嫉妬した。約6年ぶりの嫉妬だった。狂おしくも懐かしい感情に、ヴァイオレットは身を躍らせた。

ああ、この女の戦い方が羨ましい。快樂の為に生きる、その生き方が羨ましい。妬ましい。長らく忘れていた。この感覚こそが嫉妬だ。わたしはいつか、最高に高まった瞬間に再びこれを崩そう。それこそが最高に気持ち良い生き方なのだから。

ヒルガの顔を思い浮かべ、ヴァイオレットは誓う。ギリアにも同じような、いや、もっと凄まじい目に合わせてやろう、と。

そしてヴァイオレットは、自分の本能の赴くままに、痛みなど関係なく立ち上がった。そのまま瓦礫の山を登る。頂には満面の笑みのギリアがいる。

「この笑みだけは、二人とも同じなのね」

ヴァイオレットも同じように微笑み、まだ残っている方の腕をギリアの方に伸ばす。

「どうした、負け犬！」

「今に見てなさい、あんたのそのム力つく顔、最高のタイミングでぶん殴ってあげる！」

「無理だな、オレはこれからも強くなりまくりだからな」

「本当に、ム力つく女ね、あんたは」

気力のみで立ったまま、ヴァイオレットは続ける。

「ヴァイオと呼ぶことを許可してあげるから。わたしに殺されるその日まで、せいぜい惨めに生きてなさいよ！」

「オレはあんたには殺されないよ、ヴァイオ」

「……ほんとに、ム力つく……わね……」

言いたいことを全て言い終えたヴァイオレットは、そのまま意識を失い、瓦礫の山に倒れて行った。しかしヴァイオレットは、意識

を失う寸前、確かに聞いた。何か魂の奥底から捻り上げたかのような声が、大罪人『嫉妬』と任命する、と言ったのを。

そうして、地下の闘技場の優勝者は、ギリア・レプタンサと決定した。この後行われる、ギリアとベロニカの模擬試合、その時に姿を見せる大罪宝具こそが、ギリアの目的なのだ。模擬試合には勝てなくても構わないのだけれども、ギリアのプライドが邪魔をした。「怪我しちまったけど、どうするかな」

ギリアは自分の開けた大穴から青空を見上げながら、溜息を吐いた。

大罪宝具とムカつく男

模擬試合は、ギリアの落とした瓦礫の撤去が終了次第行われることになった。担当の者に、本当に軽いものだから安心してください、上と下じゃルールも変わってきますので、と言われ一安心したギリアは、撤去終了を待つことにした。

控室で座りながら先ほどの試合を思い出す。正確には試合終了時、ギリアはヴァイオレットが大罪人に選ばれたことを本能で理解したのだ。

「なんつつつか、不安定になる感じだったな……」

今まで着けていた命綱を気が付かないうちに手放してしまったような不安がギリアを襲う。

「他のやつも感じたのかあ？ 思い違いだったらやだな……」

自分の想定外の出来事で他人に奇異の目で見られるのは避けたい、ギリアはそう強く思った。だから自分から予防線を張っているのだ。男口調のままなもの、これが理由の一つだ。誰かと親しくなったり、中身が男の様だと勘繰られるくらいならば、最初から自分はこういう人間だと周りに示した方が負担が少ない、というのがギリアの考えだった。その生き方も、未だに安定していないあたり、ギリアの情緒不安定さがにじみ出てしまうが。

「もうそろか」

撤去が終わったという知らせを受け立ち上がり、そのまま闘技場のフィールドへと向かう。地上の方はギリアがぶち抜いてしまったので、模擬試合は地下で行われることになったらしい。観客席を見渡しても、観客たちには試合観戦の時の様な緊張感はない。闘技場の運営の人間もリラックスしたような表情だ。完全に全て終わった状態で、後はもう消化試合の様なものなのだろう。

向かい合う様に立つギリアとベロニカの間、ずっとギリアの試合を担当していた実況の女性の声が響く。

『さて、それでは今年度の闘技場大会の終了を祝いまして、この闘技場の主であるツリフ様より御挨拶がございます』

その言葉にギリアはツリフと呼ばれた男の方を見る。観客席の中に大きく作られた専用のエリアに、白髪交じりの髪にきつちりとした礼装を着込んだ年齢にして50前後の男が立っていた。その横には半透明な立方体の結界で守られた片刃の大剣が飾られている。ギリアは見上げる形で大きく目を見開いた。

「あれが大罪宝具か……ッ」

ようやく、初めて実物を見る事が出来た。ギリアは思わずにやける口元を隠そうともせず結界の中の体験を見つめる。

『この世界の創生より、最初の勇者が造り、始まりの女神様からこの地にこの大罪宝具が納められ長い年月が過ぎ、今なおこの地を守るこの宝具に感謝と祈りを。そして日々切磋琢磨し、我々の為に戦ってくれている戦士の皆にも感謝を』

お前らの為じゃないけどな、とギリアは心中で呟く。そんなギリアに、横からベロニカが話しかける。

「この後の模擬試合ですが、あなたは怪我をしているようですが？」
ベロニカから声をかけられたことに驚きながらも、苦笑してギリアが返す。

「そうなんだよ。だからオレ本気で行くけど全力が出ないから」

「いえ、本気じゃなくて結構です。どうせ模擬試合ですので」

「ああ？ あんたってそういうのに敵しいのかと思ったけどな」

ベロニカは無表情のまま軽く首を左右に振る。

「いえ、ただ怪我をしたあなたを相手にしても、というだけです」

「ああ、そうかい……」

呆れたようにギリアは溜息をついた。その向こうで、闘技場の主は意気揚々と話を続けている。

『素晴らしい戦いを見せてくれた選手2名は』

『

と、これからギリアとベロニカの戦いぶりについて話を移そうとした瞬間、何か強い衝撃を受けたかのように男は横に大きく吹き飛んだ。

「何だぁ!?!」

ギリアは突然の出来事に声を上げながら大罪宝具の置かれている方へと走る。観客席に飛び移ろうとしたとき、ギリアの目に結界の傍に立つ一人の男の姿が映った。金色の髪を持つ男、ジアの姿が。ジアは結界に腕を叩きつけ割ると、置かれた大剣を手に取った。

「あぁッ!?!」

その様子を見ていたギリアが叫ぶ。指を刺し抗議の言葉をぶつけ様としたギリアを無視しながら、大剣を高く掲げ、恍惚の表情でジアは闘技場中を見渡した。

「何を」

ジアはそのまま闘技場の主の男に近づき、大剣を男へと向ける。

「何を、大罪宝具がここにあることが貴様の手柄であるかのようにベラベラと長つたらしく話しているんだ? この大罪宝具は俺の物だろうが。それを貴様は、大した傲慢だなあ」

「はぁ!? 俺の? それはオレのだよ!」

観客席に飛び込んだギリアが、未だ男の首に大剣を向けているジアに向かって叫ぶ。それを聞いたジアは嘲笑うようにギリアを見た後、大剣を見た。

「おい『色欲』。わかっていない様だから言っただけやろう。これは『傲慢』の大罪宝具。『傲慢のルシファー』という名の大剣だ。貴様の求める『色欲のアスモデウス』ではない」

「ここまで戦ってきてハズレかよ!」

ギリアの叫びを無視し、ジアは大剣を持ったまま歩き出す。

「……って、ルシファー? なんか聞いたことある名前だな」

ギリアはルシファーという宝具の名前に眩く。もともとあまりそっくりものに興味が無かったので詳しくはないが、それでも友人がそういうものが好きだったので会話の中で聞いたことのある名前だ。

天使の名か悪魔の名かはギリアは覚えてはいなかったが。最初の勇者も何故このような名前を付けたのだろうか、とギリアは首を傾げる。その間にもジアは闘技場から出て行くこうとしている。

「いやいや待って！ つうかお前誰だア！？」

初対面で突然登場して大罪宝具を持つていこうとするジアに向かってギリアがつつこむ。それに面倒くさそうな顔をしたジアは答えた。

「大罪人『傲慢』のジア、だ。いずれ俺の名前は全世界中に知れ渡ることになるから今は覚える必要は無いぞ『色欲』」

「ああわかった。あんたはム力つく男だな」

そのまま拳を握りジアに向かって殴りかかる。観客席を飛び飛びで進み、加速して拳を振り下ろすギリアとジアの間には黒髪の青年が割り込み拳を受け止める。

「ッ！？ テメエは！！」

「ようヒース、遅かったじゃねえか」

すみませんでした、と頭を下げるヒースの姿を見て、ギリアはその見覚えのある顔を息をのんで見つめた。その男は、いつもギリアに試合の際に案内等を行っていた運営側の人間だった。ちなみですが、とヒースはギリアに向かって言う。

「ここで1つネタばらしをさせて頂きますと、あの闘技場の選手を狙った事件というのは、実は私が起こしていたものだったんです。

ジア様に早く大罪宝具を手にしていただく為にもさっさと大会に終わって欲しかったので」

「なら、オレを狙わなかった理由は？」

「『色欲』に死なれてしまったては困るのです」

実に嫌な理由だ、とギリアは思った。この男が犯人だとして、試合の始まる前や、不戦勝を告げに来た時など、チャンスはいくらでもあったというのに、自分を狙わないというのは侮辱だ。

「ようするにあんたらは2人ともオレにとってめちやくちゃム力つく男ってわけだ。そこ動くなよ、今一発殴る」

「俺を殴るなんて傲慢っぷりもいいのだが、あいにく今は急ぎなのだ。俺がわざわざ殴られる理由もねえし、付き合っつてやる義理もねえ」

そう言い、ジアはそのまま闘技場から出て行くこととする。その時、開場中に声が響き渡る。

「さあ大変です！ 何と突然の自供により、選手に怪我を負わせていた犯人が判明してしまいました！！」

実況の女性の声と共に、ジアとヒースの眼前に、一人の女性が舞い降りた。右手に拡声の為の道具を握った彼女は、体をくねらせポーズを決めたまま叫ぶ。

「ここで逃がしてしまつては闘技場の女として恥になつてしまいました！ ああ！！ そこで大罪宝具を向けられて無様に腰を抜かしている主様に顔向けできません！！」

おいと小さく抗議の声を上げる闘技場の主の男を無視して女性は続ける。

「さあ！ 生きてここから出るつもりなら全力でかかってきなさい！！ 相手が男じゃやる気は起きませんが、女性の前です、私も全力で対峙しましょう！！」

同時に、運営側の人間が何人も雪崩の様にジアとヒースに向かっていく。

「実況だからって舐めないでくださいよ！ 闘技場で働くつていう事がどれだけ大変か、わからせてあげましょう！」

同時に、女性が右手の拡声用宝具に向かって強く叫ぶ。するとその声が波となりジアとヒースに襲い掛かる。

「さあお客様は離れていてください！ ギリア様は応援してください私の活躍を！！ 勝つたらキスでもしてくださいな！ じゃあ、行くわよみんな！！」

おう！ という声と共に人垣がジアとヒースに襲い掛かる。それに対し、ジアは大罪宝具『傲慢のルシファー』を構えることに応じた。

「『明けの明星』」

ジアがそう呟くと同時に、『傲慢のルシファー』から眩いほどの光が発せられる。その光に包まれるように、周りの人間たちが次々に切り刻まれていく。

「ッ!?」

傷ついた体を庇いながらギリアは避けるように後ろに跳ぶが、ジアを中心とした光の渦はそのような事はお構いなしにギリアも包み込んでいく。

闘技場内を静けさが満たす。

「なるほどな。まあ、初めてにしては上出来だろう」

確かめるようにして大剣を握り直したジアとヒースの周りには、実況の女性以外の運営側の全員が倒れていた。ギリアも全身を一瞬のうちに切り付けられ、前のめりに倒れ込む。

「この男たちは生きているぞ。もちろん『色欲』もな。今こいつを殺してしまつては全てが水の泡」

ジアは自らが切りつけた人間を見て、実況の女性に言う。

「俺は本当に急いでいるのだ。さあ、選べ。こいつらの治療をすぐにしてやるか、肉壁として一瞬俺の行く手を阻むか」

そのままジアは、ヒース、と短く名を呼ぶ。それに反応したヒースが妙なものを取り出す。取り出した時は立方体だったそれは、瞬時に巨大な板へと変わり、宙に浮く。

「貴様の迷いに付き合っている暇はないのでな」

『行かせるはずか』

「ない、と言おうとした実況が、大剣の峰打ちによって倒される。

ジアとヒースはそのまま宙に浮いた板に乗る。

「これから長旅になるのでな、今貴様などに精力を無駄遣いするわけにはいかないのだ」

これもまた俺の傲慢か、と一人呟いたジアは、舞い上がる板の上で闘技場の人間を見下ろしながら言った。

「では諸君！ また近いうちに会おうではないか！ その時こそ全

ての始まりなのだよ諸君！ 楽しみにしていたまえ！！」
遠ざかるジアの声を聞きながら、傷だらけのギリアはゆっくりと意識を手放した。

目を覚ますと、闘技場の医務室のベッドの上だった。急ぎ跳ね起きて状況を確認する。どうやら丸1日経っているらしい。ギリアが上体を起こし、昨日の出来事を考える。

ジアと名乗った男は、ギリアを殺さなかった。今は殺してはならないと言う様な口ぶりだったが、と思索していたギリアの体に影が差す。影の方を向いてみると、そこにはベルギアが経っていた。

「気が付いたみたいねえ」

胸を強調するような前屈みの体勢でベルギアが言う。ベルギアが存在に疑問を覚えたギリアは首を捻った。

「なんでデメエがオレのベッドの隣に立ってるんだよ」

「あなたにお知らせがあったのよう」

「知らせだ？」

そうなの、と頷いたベルギアは、ベッドの端に腰かけながら話を続ける。

「イワニガーナの王宮からの直々の御達しよう。ジアと名乗った大罪人『傲慢』の男を、目的地到着前に生け捕りにしろと」

「色々気になるところはあるが、なんでオレがそんなの受けなきゃなんねえんだ？」

「あなた以外にも、腕に覚えのあるもの片っ端から話しているらしいのよう。よっぽどその目的地とやらに行かれないのねえ。それにあなたは受けるんじゃないの？」

ギリアはベルギアの事を見上げるような形でじろりと見やる。

「何故オレが受けるって？」

「あなた、あの男の事めちやくちや殴りたそうじゃない」

自分の事を見透かすような物言いに、少し嫌な気分になりながら

も納得した様に苦笑するギリアは、それなら、と急いで立ち上がる。
「急がねえと、他のやつに先を越されたら堪らないからな」

「あらあら、すごいヤル気なのねえ」

うるせえと呟き、ギリアは着替えの準備をした。その様子を、笑みを浮かべたままベルギアはじつと見つめている。

「……」

「……どうしたのかしらあ？ 着替えないの？」

着替えを片手にベルギアを見るギリアは、そう言ってきたベルギアに冷たく言い放った。

「話は分かったから、いい加減出てけよ。何時までいるつもりだよ」
右手を顎に添え、わざとらしく笑みを作りながらベルギアが返す。

「まだ用事があるのよ、だから気にせず着替えを続けて構わないのよ？ それとも、『色欲』なのに人前で、同性の前で肌を見せるのも恥ずかしがるほどの初心なのかしらあ？」

「……チツ、わあつたよ、それで、今度はどんな話があるっていうんだ？」

「あなたがジアを殴りに行く旅、私もついて行く事にしたのよお」
さらりと言つてのけた言葉に、着替え途中だったギリアの動きが止まる。そのままブリキの人形のようなぎこちない動きでベルギアを見る。

「はあ？」

「だから、あなたについて行くって言ってるのよお」

「何のつもりだア？」

まるで小さい子供に言い聞かせるような言い方でベルギアはギリアに説明する。

「私は大罪人に成りたいのよう。その為にい、なんであなたが選ばれたのかを知る必要があるわあ。処女のまま選ばれるなんて、それこそ何か重要な要因があったはずよ」

「許可すると思ってるのか？」

「あら、許可が必要だなんて言うのかしら？」

再び舌打ちをし、ギリアは悟る。この女は自分が否定したらまるでストーカーのように付いてくるつもりだと、ならばすぐそばに置いておいた方がましかと、ギリアは決めると、渋々頷いた。

「ウザいと思ったらぶっ飛ばすからな」

「そっちこそ、寝処女を貫かれないように注意しなさいよねえ」

「寝首じゃねえのかよ。もしそんな事したら全身の穴という穴にぶっさして、奥歯全部ぶち抜いてやるよ」

「あら怖い」

そういい、一瞬の沈黙の後両者同時にくすりと笑いだす。そんな医務室の扉が勢い良く開け放たれた。

「私も行きますから、どうかときめかせてくださいませー！」

「うわ、めんどくさいのが来た」

ぼやくギリアに向かって、医務室に入ってきたロベリアが美しく微笑む。横に控えるように立つベロニカは続きを言う。

「私の元にもあの男を捕えよとの話が来たので。不本意ですが、ロベリア様の願いならば喜んで貴様と共に旅に出しましょう」

「騎士様も一緒かよ。数倍めんどくせえ」

「何か問題でも？」

眉を吊り上げて言うベロニカに、諦めたように溜息をついたギリアは無言の了承をした。

「それで、あの男の目的地は」

話題を変えるためにギリアが言った言葉は、しかし新たな来訪者によって妨害された。室内に響くノックの音の後、ハスキーな声が聞こえてきた。

「失礼します」

入ってきたのは、中性的な顔立ちの人間だった。年のころは16前後、少年の様に少女の様にも見える不思議な顔のその人は、肩まで伸びている髪を払う様に一度軽く首を振ると、真っ直ぐな視線でギリアを見つめてきた。

「僕の名前はエーデルワイスと言います。属性は『勇気』。どうか

僕も連れて言っただけだ！」

エーデルワイスと名乗る来訪者の言葉に、4人は全員、自分以外の誰かの知り合いなのかと顔を見合わせた。しかし全員の間には知らないというものが。誰の知り合いでもない来訪者は続ける。

「ギリアさんとベロニカさんの、それぞれの試合見させてくださいました！ 僕はあなたたちの様な闘技場のファイターに憧れているんです。だからどうか！」

なんだかどんどんめんどくさくなってきた、とギリアは医務室で一人頭を抱えた。

むかつく男に斬られるし、ベルギアは虎視眈々とこの立場を狙うし、ロベリアは相変わらず意味わかんねえし、ベロニカはムカつくし、なんかわけわかんないの増えたし、もう最悪だなオイ。ギリアは心の中でそう毒づいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6899z/>

大罪宝具と異世界戦争

2012年1月11日01時46分発行